暗黒文花帖

ヲリア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に住まう天狗の妖怪、射命丸文は突然、八雲紫ではない何かの謎の力により、ＨＵＮＴＥＲＸＨＵＮＴＥＲの世界、それも暗黒大陸に転移してしまう。その力による延命こそあるものの、人々に忘れられた妖怪は消え去ってしまうことから、彼女は人々から畏れを得るべく行動を開始する。

サバイバル要素はありません

目次

Stage1. 目覚めた天狗少女 ―― 1
Stage2. 自覚のない悪意 ―― 12
Stage3. 陪審員は自分勝手 ―― 21
Stage4（前）. 追跡者（ハンター） ―― 33
Stage4（後）. 追跡者（ハンター） ―― 38
Stage5（前）. 化け物共（フリークス）の逢瀬 ―― 45
Stage5（後）. 化け物共（フリークス）の逢瀬 ―― 51
Stage6（前）. 観音さま猿田彦さま ―― 62
Stage6（後）. 観音さま猿田彦さま ―― 69
Ending. 勝った負けたは無粋の極み ―― 78
Extra Stage. 幻の影をみた旅団 ―― 83

Ｓｔａｇｅ１．　目覚めた天狗少女

はて、ここはどこでしょう？

とある世界のある場所で、一人の子供が地べたに座っていた。いや、木によっかかって寝ていた、というのが正解だろうか。

その姿は、白いシャツに黒いスカートを着て、特徴的な紐と毛玉がついている、赤い山伏風の帽子をかぶった十代前半の少女であった。ただ、その赤い目は幼い姿と裏腹に、深い知性と冷酷さを秘めていた。

彼女の名前は射命丸文（しゃめいまるあや）。幻想郷に住まう鴉天狗であった。

昨晩のことなら覚えている。いつものように博麗神社でどんちゃん騒ぎをして、お酒をたらふく飲んだ記憶がある。もっとも、飲んだあとの記憶はおぼろげであるが。それでも生まれてこの方数千年、泥酔したからと言って木の幹を背もたれにして朝を迎える、なんてはしたないことは――――彼女の記憶の中では――――したことがない。

湿度も気温も高い・・・魔法の森ならもう少し寒いはずですね。幻想郷どころか日本の中ですらないんではないでしょうか。

彼女は幻想郷ができるより前から日本に存在し、全国を旅して回った烏天狗の妖怪だが、今この場の気候に合うような地域は日本にはなかった。

ましてや、目の前で大きな口を開いている化け物なぞ、日本どころか世界のどこにもいないと思えた。

後ろは私が背もたれにしていた木の幹。

左右は・・・爪で引っかかれそうですね。

下は地面がぬかるんでて通りたくないですし、なにより・・・

「ぼんっ」と音が出るぐらいの――――土の上なのに――――勢いで手を下に叩きつけ、その反動で彼女の体が２メートルほど浮き上がる。それにより相手の噛みつきを回避する。

さらに背中に黒い羽を顕現させると同時に、彼女の『風を操る程度の能力』によって上昇気流を作り出し、羽を撒き散らしながらさらに５メートル高度を上げる。

逃げられる、と思った化け物は飛びかかるために突き出した前足をネコ科のようなしなやかさで縮めて着地し、その勢いを完全に殺す。続いて、後ろ足で「ため」を作り、すぐさま上空にいる彼女に対して今一度飛びかかる。

しかし、彼女の反撃準備はすでに整っていた。

「空中戦が鴉天狗の十八番です！」

化け物が「ため」ている間に上昇気流を解除して下降気流を展開、下方向へ自身のベクトルを変更する。

そのまま右足を突き出すことで、彼女の下駄が化け物の眉間にクリーンヒットした。

下降気流による勢いに化け物が飛びかかる勢いが加わったこと、さらにそのタイミングでカウンターされると思っていなかったことにより、すでに化け物の意識は朦朧としていた。

このまま蹴り抜いてもいいですけど・・・ある程度形が残っていたほうが記録は取りやすいですね。

そう考えた彼女は、踏みつけている右足先に下降気流のエネルギーを集中。そのまま解き放った。

不自然に上から下へと吹き荒れる暴風が、周囲の木々を揺らし、土をめくりあげ、化け物の体を押さえつける。

「”天狗のダウンバースト!”。さて、奴の容姿はっと。ふむ、ワニの頭に獅子の体、それに大鷲の翼。この世界の鵺(ぬえ)の姿でしょうか。たしか外国語ではきめらって呼ぶんでしたか」

そう言いながら観察を続けていると、彼女は自らのダウンバーストによって生じた木々の揺れがいつもより大きいように感じた。

この辺り一帯の植物の特性だろうか、と考えていると、枝から切り離された一枚の葉が風切り音とともに、下降気流に加えて重力の影響を受けたかのような加速度で真っ直ぐに落ちてきて、切れ味の良いナイフのように、彼女のスカートの端に切れ込みを入れて、地面に突き刺さった。その長さは彼女の腰のあたりまであった。

「あやや？」

そうして初めて彼女は下降気流を弱めて上を見上げる。この森は

先程の葉を落とす木の群生地だったのか、同じ葉が十枚や二十枚どころの話ではなく、数えきれない雨のように降ってくる。下降気流を完全に切っても木々の揺れが収まらないあたり、はじめから振動が加わったときに木の葉を落とす構造になっていたのだと考えた。

事実この木は、幹に動物がぶつかったときにその衝撃を全体に分散し、倒壊を防ぐと同時に枝を揺らすことで、剣のように固く、重さのある葉を落とすことで、その下にいる動物を攻撃し、その死体を土の養分にするという特性を持っていた。

ダウンバーストによる拘束が解け、意識を取り戻しつつあったキメラは、しかし、この剣の雨によってまたしても地面に縫い付けられた。今はその分厚い筋肉と頑丈な肋骨や頭蓋骨が重要器官を守ってくれているが、この雨が十秒も続けば、やがて耐えられなくなってその巨体を養分へと変えることだろう。

当然、この雨を引き起こした彼女も洗礼を受けて、何も為すことなく、為す術なく、死ぬことだろう。

ただの人間であれば。

「この私に、弾幕勝負を挑んでくるとは、舐められたものですね！」

彼能を展開。雨の一粒一粒から生じる風の軌道を読む。わずかに風の影響を受けて揺れ動き、葉っぱ同士の衝突による軌道の変化を除けば、ランダム射出される大量の直線の弾。

「気合よけは好きではありませんが・・・この程度なんてことはないですね」

ただ近くに飛んできた弾を、ぎりぎりで避けるだけ。それ以上でもそれ以下でもない。

彼女はダンスでも踊るかのようにステップを踏み、剣の雨の中を自在に泳いでいく。時折剣が彼女の肌をかすり、傷つけることはあっても、致命傷を与えるには至っていない。

そもそも、彼女、射命丸文は妖怪である。妖怪は人の畏れから生まれるものであり、その成り立ちは通常の生物とはまるで異なる。彼ら妖怪の身体は肉体的な損傷にはめっぽう強い。その反面、儀礼用の武器や、祈祷師によって祝福された札など、ただの生物には武器になり

えないものによってダメージを受けることもある。彼女ほどの妖怪となれば、ただの鉄の剣が頭や心臓に二、三十回突き刺さったところでいっかいやすみになる程度だろう。
彼女は余裕ありげに、遠く離れた場所にある弾幕の薄い場所（イーモード）に行くこともなく、ダウンバーストの爆心地であった危険地帯（ルナティックモード）で自らの実力を見せつけるがごとく、被弾ぎりぎりを攻めていく。
「記念に撮影でもしておきますか。『号外！外の世界の植物は弾幕ごっこがマイブーム!?』ってね」
懐から年季を感じるカメラを取り出すと、彼女の妖力を込めてシャッターを切る。
すると、降り注ぐ剣の雨のうち、カメラに写った弾幕だけが一瞬にして消え去る。
彼女のカメラには『カメラを持つものに対して飛んでくる射撃を写真に撮ると、その射撃が消える』という特性がある。これを用いて、かつて彼女は幻想郷に住まう様々な妖怪、神、人間が放つ数々の回避不能弾幕を写真に収めてきた。
今回は弾幕をかき消す必要はなかったが、様式美というやつである。
３０秒も降り注いだところで、枝の揺れがおさまり、雨が止んだ。初手の時点で地面に縫い付けられていたキメラは全身に剣の雨を浴びてすでに事切れていた。
そんな一つの災害が起こった中で彼女は腕や足に軽傷を負い、服にいくつもの切れ込みを作り、その肌をさらけ出していたが、一呼吸入れる間には肌も服も修復されていた。
「あちゃー、写真を取る前にぐちゃぐちゃになってしまいました。まあここでカメラに撮ったところで現像する機械もないし、手帳には思い出しながら絵にすることにしますか。」
そう言いながら、彼女の手帳、文花帖（ぶんかちょう）にさらさらと今回のキメラと植物について記録していった。
さて、なぜ私は幻想郷の外の世界に飛ばされてしまったのでしょうか。これは昨日の宴会の記憶を思い出す必要がありますね・・・

博麗神社。
妖怪退治の専門家、博麗の巫女が住まう神社であるが、当代の巫女、博麗霊夢の気質からか、この場所は時折妖怪寺と言われても仕方ない程に妖怪が集まることがある。
誰かが起こした異変が解決すれば宴会、祝い事があれば宴会、なくても誰か（主に神社に住まう鬼）の気まぐれで宴会が開かれる。
もちろん大酒飲みが多数集まるこの宴会で、飲まないことはむしろ失礼に当たる。
これに参加していた射命丸文は当然コミュニケーションの一貫で、上司に勧められた酒も、部下に注がれた酒も、同僚と楽しく話しながら注がれた酒も、すべて飲むこととなる。それでもなお、泥酔とは言わず、ほろ酔い程度で済むのはさすがは酒に強い天狗と言える。
たまに思い出したかのように賽銭を要求する巫女の願い叶わず、万年空になっている賽銭箱の前で宴会芸が盛り上がってきた頃、彼女に話しかける者がいた。
「お隣よろしいかしら？」
「おや、賢者様、もちろんよろしいですよ。ささ、どうぞ、天狗の銘酒ですよ。」
「あらあら、気前が良いわね。それでは遠慮なく」
とくとくと、話しかけてきた彼女の持つ盃に天狗のとびっきりきつい酒を注ぐ。
彼女は八雲紫。人間に忘れ去られ、滅びゆく運命だった神々や妖怪が暮らしていける理想郷、幻想郷を創り、その管理をしている賢者である。
能力は『境界を操る程度の能力』。異なる二点の空間をつなげて自在に移動する他、概念的な境界も操ることができるという。
ただ、賢者とはいっても常に忙しいわけでもないらしく、住民に声をかけることもある。そんな彼女が一体何の用があったのか。

「ねぇ、貴女」
「なんでしょうか？」
「かごの中が狭いと感じることはないかしら？」
「・・・」
酒によって蕩けた頭では、その質問の意味をすぐさま理解できなかったが、その意図はすぐにわかった。
紫はこのテの質問を数年に一度するからである。
（特に今困っていることもない・・・かご、ですか。天狗の住まう土地が狭いか、とか、天狗の社会から自由になりたいか、という解釈でしょうね）
簡単に行ってしまえば住民の意識アンケート調査や、幻想郷の環境改善活動の類である。それを難しく、解釈次第ではどうとでもとれる言い方をするのは、彼女のキャラ付け・・・などではなく、賢者の処世術、保険の一種である。
『あの時ああいったのはこういう意味じゃないのか』と言われても、都合が悪ければ『それはあなたの解釈』と言い返せる。
逆に、『あの時私はあなたにこう警告しました』と咎めたり、『役に立ったでしょ？』と恩を着せることもできる。
まあそんな態度を永らく続けたものだから、胡散臭いなんて言われるようになるのだが。
さて、ここで問題となるのは、この質問はただのアンケートではないということだ。
普通なら、『貴重なご意見ありがとうございます。今後の活動に還元していきます』となり、その後アンケートをかいた本人が何かすることはない。
だがこの意識調査、回答次第では『じゃああなたが解決して』と投げられることもある。
「（たまには自由に、新しい記事のネタを探しに行きたい・・・という気持ちもなくはないですが）いえいえ、特にはありませんとも」
「あらそう？なにか物足りなさそうな顔をしているように思えましたが」

「きっと気のせいでしょう。そんなことよりほら、お酒が進んでいませんよ？」
その後お酒を飲みながら他愛のない話をして、彼女はどこかに行ってしまった。
今回はうまく面倒事をかわせただろう、あとは宴会芸を心置きなく楽しみ、妖怪の山の自室で床についたはずだ。

それがこのザマである。
なにか選択を間違えたのだろうか。
もっと馬鹿らしく「かごってなんですか？」とか、胡散臭くはぐらかしている部分を追求し続ければ、面倒に思われていただろうか。だが、そこまでバカのマネをするのは私の誇りが許さない。
あるいは心を読まれたか？あの時、周りの空気に歪みはなかったから、スキマ（古明地さとりの読心）は空いてなかったはず。だが、そんなものに頼らずともあの大妖怪なら自前で嘘をついているかどうかぐらいは読めるだろう。
「そろそろ出てきてもいいのではないですか、八雲紫？」
返事はない。スキマが開いている様子もない。巫女が彼女を呼ぶために結界を緩める、といった技能はないし、そもそも感じ取ることすらできない。何かを成し遂げたのを確認したら帰すのか。
状況も、実行能力も八雲紫がやったことだと言えよう。理性的にはそう考えられる。それでも、彼女は永らく紫が何のために行動してきたかを見てきた。何を好み、何を嫌うかを知っていた。
彼女は幻想郷が好きだ。だが、それより前に、妖怪や神、忘れ去られしものたちを憂いていたからこそ、幻想郷を作ったのだ。
もちろん、甘やかすだけではない。時には試練を与えることもある。それでも、送り出す前に必要最低限の説明はしてきていた。
何より違和感があるのは、人の畏れなくしてはたちどころに消え去ってしまう私（妖怪）が、それなしでも数年程度は生きられるだろう、謎の力が内側に気をめぐらせれば感じられることだ。

紫の妖力ではないのはわかる。神の力に近いか。
本命は未知の神による転移。
対抗は紫が神に頼み込んで、外の世界の調査活動をしてもらうためか、私の心の願いを叶えたか。
大穴は紫が突如謎の力に目覚め、その力を試し打ちしたかったか。
紫が関わっているとすれば、彼女の思惑を読まない限り助けは来ないと考えよう。
あとは、この謎の力がなくなった時に自分がどうなるか。
希望的観測では、幻想郷に帰れる。だが、帰れると決まっているわけでもないし、好き好んで死を待つこともない。
この世界で天狗の名を広めて、畏れを得る。
願わくば、この世界にも適度に弱くて、信心深い人間がいてくれれば良いですが。
・・・最悪、知的生命体なら何でもいいです。

探索初日。まずは上空から様子を見ようとしましたが、先客がいました。完全に空の色に同化し、獲物が近付くと乱気流を引き起こして自分のもとに引き寄せて食べるようです。
私は妖力による飛行ができるためヤツの餌食になりませんでしたが、暴風の中を無理やり飛んでいると、あの謎の力が減っていくのを感じました。しかも、地上は森が濃くて地表が見えませんし、木がないところは黒い瘴気で覆われています。
仕方ないので、歩きながら探索することにします。

探索二週間目。海を見つけました。幻想郷には海がないので、これは外の世界で生きていた時以来ですね。
海岸の植物が風で飛ばされたのか、小枝や草花、はては大木まで奥

の方に浮かんでいて、あまりきれいではないです。
その大木に渡り鳥がとまりました。すると、浮かんでいた大木が海の中に沈み、それに驚いた鳥が飛び立った瞬間、クジラのように巨大な魚が大きな口を開けて飛び出て、鳥を食べてしまいました。飛び上がった身体が海に打ち付けられ、かなり遠く離れたこちらにも水しぶきが飛んできました。いやー、いいものを見た。

探索1ヶ月目。私の寝ていた場所に何か残ってないか、変化がないか気になったので帰ってみます。
あの時串刺しにされてしまったきめらは今や影も形もありません。ここら一帯に群生していたあの木が全部倒れています。
それと入れ替わるように、私の腰ぐらいの大きさのアリがたくさんいました。
実はあの大きさのアリは、初日から木の上にいて葉っぱをもしゃもしゃと食べていたんです。その時は赤みがかった紫色でしたが、今はあの葉っぱと同じ、黒みがかった緑色です。その体は硬く、爪は鋭い。後から調べたところ、あの木の幹の中心には、あの葉っぱの硬さを生み出す樹液を分泌する器官があったようで、それを好んで食べていたようです。
それがうじゃうじゃいるということは、あの時葉っぱを食べていた個体の身体が変化したのではなく、食べたものの特性を持った卵を生んだのが正解でしょう。
まだまだ私の脅威になりえませんが、あまり彼らの生態系を乱したくないので、この場は引くことにしました。
もしあのアリが食べたものの知性まで受け継いだ卵を産めるとしたら、本当の最終手段として、私の身体を一部食べさせることで知的なアリを産ませて、それに私を畏れさせることも考えましょう。抜け落ちた髪の毛とか羽ならまだいいですけど、腕や足まで必要だとしたら痛いし、あと5年はやりませんけど。

探索３ヶ月目。ついに人間らしきものの痕跡を見つけました。
三角形に組まれた鉄骨と、ボロボロになった布地。かなり年季が入っており、もはや使われていないのは明らかです。
その中で私の知らない文字で書かれた手記らしきものを見つけました。また、食器類の他に、中がかびており、食料が入っていたと考えられる缶詰が大量にあったので、推定ではありますが、この大地の外からやってきた調査員と考えられます。
そのため、この場所から一番近い海岸に行き、その岩盤を調べると、船は残っていませんでしたが、錨を刺した痕が残ってました。つまり、この先に行けば、あの調査員のような人間のいる国があるということです。
この世界がどれだけ広いかわからない以上、いままではあてもなく飛行し続けてあの謎の力をムダにするのは避けていましたが、これなら飛んでいってもいいでしょう。

その次の日、私は調査員の手記や目ぼしいものを回収し、助走をつけて錨の痕跡があったところから勢いよく飛び出しました。
何日かかるかわからないし、そもそも国が残っているか心配ですが、なるようになるでしょう。
高度は渡り鳥と同じくらいで、速度はそれより気持ち速めです。
３時間飛んだくらいでは大陸が見えてきませんが、回収したもの中の方位磁石らしきものを頼りに飛んでいきます。
・・・おや、あの大陸で見かけたあの疑似餌を浮かべた巨大な魚がいますね。こんな遠くにも生息していたのでしょうか。
ですが、疑似餌の上に鳥が乗っているのに捕食してないですね。別個体の可能性もありますが、一応追記しておくことにしましょう。

5日後、ようやく大地が見えてきました。調査員の持っていた道具からして幻想郷よりも文明が進んでいると思っていましたが、かつてオカルト異変が起こった時に頼んで特別に八雲紫に見せてもらった外の世界と変わらないか、それよりも前の時代でしょうか。あのときの外の世界には非常に高い建物が所狭しと並んでいましたが、ここは硝子製の高い塔を中心に街ができているみたいなので、偉い人がどこに住んでいるか一目瞭然でいいですね。

挨拶しに行くのもいいですが、まずは山に着陸し、ここを拠点とします。

さて、この世界の人間から畏れを得るために、どんな異変を起こすことにしましょうか。ここは単純に・・・

子どもでもさらうことにしますか。

Ｓｔａｇｅ２．　自覚のない悪意

時間は過去にさかのぼり、文が上陸する3日前。
ハンター協会会長室に通信が入る。
「はい、こちらハンター協会会長室のビーンズです」
『こちら暗黒大陸調査隊、緊急事態発生に付きアイザック＝ネテロ会長との通話を要請します！』
人類未踏の地、暗黒大陸。この地には国によって規模は大なり小なり違うものの、古来より多くの国がこぞって密かに人員を送っている。
多くの国が人員を送る理由は、莫大なリターンにある。
万病に効く霊草や、究極の長寿食など、あらゆる世の権力者が欲しがるものがそこには眠っている。
未だに人員を、密かに送っている理由は、世界を滅亡させると言われているリスクにある。
かつて5大陸が個別に暗黒大陸のリターン獲得に挑み、そのことごとくが失敗した経験から不可侵条約が結ばれている。
しかし、リターンを獲得すれば他の国に対して大きく有利を得ることができることから、条約が結ばれた今でも船が出ている。
「（まだ上陸する予定日には遠いし、今までの定期連絡には問題なし。一体何が？）わかりました、すぐにつなぎます。会長！」
「いまかわったぞい。要件は？」
『はい、先程暗黒大陸方面から人間の形をした飛行物体をカメラで確認しました』
もちろん、それは文のことである。
彼女が道中で見かけた、大木を疑似餌にした巨大な魚は『ツリーアンコウ』と名付けられており、暗黒大陸近海にすむ魚であることから、擬態の意味を込めてそれに似た形をした船が作られていた。
本来疑似餌となっている大木の部分にはカメラが仕込まれており、そこから海上を確認することができた。
「なんと、それは本当か！」

長年生きてきた会長の記憶にも、暗黒大陸からの飛来物の情報を得たことは少ない（実際は確認されていなかっただけで、潜伏しているものも多くいる）が、それが場合によっては非常に厄介なことになることは理解していた。
「（飛行物体そのものが人類に対して敵意を持っているかどうか・・・たとえ我々にに好意的だとしてもウィルスに感染していたら厄介じゃの）して、容姿は確認できたか？」
「こちらで確認したところ、目測で身長１３０～１４０ｃｍ、性別はおそらく女。顔は確認できませんが、これから映像と位置情報を送信します」
　ビーンズの持つ端末に写真と位置情報が表示された。そこからさらに、速度と角度からおおよその到達位置と時刻を計算する。
『要件は以上になります。現在船は待機中ですが、指令の変更はありますか？』
「飛行物体はこちらで対処する。待機を解除して暗黒大陸に向かい、主目的を行方不明の調査員の捜索から飛行物体の調査に変更。以上じゃ、報告感謝する」
『了解しました、それでは上陸後、発見があり次第報告します』ブツッ
「今回は本当に運が良かったの。もし街に紛れ込まれたら何が起こるかわかったもんじゃないわい。ビーンズ、結果は出たか？」
「はい、こちらになります」
　ビーンズは計算が終わった端末の画面をネテロに見せた。
「こりゃまた嫌な時期に来るもんじゃのう。さて、どう対応したものか・・・」

（あの時・・・もっと強ければ・・・知っていれば・・・考えていたら・・・こんなことにはならなかったのかな・・・）
　生身のまま空を飛ぶという稀有な体験をしている少年は、景色とともに流れる走馬灯にそんな思いを抱いた。

少年、チキル＝ハーブはいわゆる負け組である。
物心つくころに父親は長期の単身赴任をしていた。金こそ家に送ってくるものの、家に帰ってくるのは年に1回あればいいところ。当然少年は父のことなぞ近所のおじさんよりも知らない存在となった。
父の不在は、夫を愛していた母の心に影を落とした。
少年が１０歳になるまでは、子供の前では気丈に振る舞っていた。元気な母を演じていられた。
だが、物事の分別がつけられるようになってからは、それまでの演技に陰りが見えるようになり、もはや化粧をして外出するのも億劫になっていた。
そんな中、母が小学校の父母の会に出席するようになってからは、とても生き生きとした表情を見せるようになった。少年の目にはただ雑務をやらされているようにしか見えないが、どうやら父母の会会長の人心掌握力が凄まじかったらしく、母は頼られる存在になれて嬉しく思っているようだ。
それで終われればみんな幸せ、ハッピーエンドであったが、そううまくいかないのが世の常。
少年はある日からだんだんと、母の愛情が薄れていくのをなんとなく感じていた。
自分の肌の様子を気にかけるようになったり、家の掃除を徹底するのはいいものの、隣町のほうが僅かに安いという理由で、少年に学校の帰りにおつかいを頼むようになり、どこか家から遠ざけようとする意思が感じられた。
そんな折、頼まれたおつかいを忘れてまっすぐ家に帰ってきた時には、なんとなく上ずった声で追い返されたこともあった。
もし少年が大人になってこのことを思い返したなら、これが不倫であったことに気づいただろう。

そして、父の、男の背中を知らずに育った少年は、外に連れられて遊ぶことも少なく、男でありながら内向的で凝り性な、いわばオタク、ナードと呼ばれるような存在になった。
もちろんそれはそれでいいところはあるが、小学生のそれはやはり致命的であり、いじめの対象となる十分な理由になった。
だがそれは、はじめは暴力によるものではなく、悪意によるものだった。そしてそれは彼が小学3年生の時に始まった。
「ヘイ、チキル！今日俺はスペシャル定食を食べてぇんだ！ちょいと金貸してくれよ！」
彼の名はビフス＝カルヴィン。チキルとは正反対の、いわゆる勝ち組である。
運動神経に優れ、コミュニケーション能力抜群でクラスの中ではちょいワル系のポジションに付いた。
普段から肉定食を食べられるほどのお小遣いをもらっており、間違いなくチキルより裕福な暮らしをしていた。
「あぁ、ビフスくん。でも、僕あまりお金持ってないよ？今日だってB定食ぐらいしか買えないよ」
「大丈夫、惣菜パン1個分でいいから、それに来週倍にして返してやるよ！」
「うーん、それならいいよ」
チキルは素直に応じた。今日は少しひもじくなるが、お金が増えるのはいいことだと、そう思ったのだ。
よしんば返してくれなくても、そのときはちゃんと彼についていって、彼の定食のグレードを下げてもらうべく言うつもりだ。
次の週、ビフスはきちんと1．5倍の金額をチキルに返した。
2倍じゃなかったと若干不満げながらも、お金が増えた事自体には素直に喜んでいた。
そのようなやり取りは何度か行われ、そのたびにチキルはビフスのことを信頼していった。ただし、途中何度か支払いを遅らせたこともあった。
それこそがビフスの子供じみた悪意であった。

彼はＴＶ番組で偶然詐欺師の手口を目にした。それは、少ない金額からはじめ、貸したお金が増えた状態で返ってくることを印象づけることで、大金を預けても返ってくるという信頼を得るものである。
そして最後には、大金を預けられた詐欺師は預けた人の手の届かない場所に行くものである。
もちろん、年頃の少年にそのような大金があるはずもないので、後半の部分についてはビフス自身もやるつもりはなかった。ただ、全半の部分が面白いと思ったので、自分でもやってみようとしただけだ。
そんな好奇心から始まったいたずらによって、チキルからの信頼を得ていったビフスは、やってみようと考えた時には思いもしない高揚感に包まれていた。
それは、思うように人を動かす愉悦であった。
次第に、ビフスはチキルのことを完全に下に見るようになった。
適当な理由をつけて金を返さなくなっても、チキルのお金がお小遣い以外の貯金から出るようになっても、返さなくなったお金が増えたお金よりも多くなっても、いつかは返してくれると信じているチキルを、むしろ哀れに思うことすらあった。
だが、その詐欺の手口は、いずれ高跳びするところまでがセット。長期間に渡って返さなくなれば、いずれは信用もなくなっていく。６年生になったころには、返してくれる存在だとは思われていなかった。
ある日、二人の舎弟とともに街を歩いていたビフスは、同じく通りを歩いていたチキルを見つけた。
「おっ、チキル！ちょうどいいところであったな！今日の俺はあそこのステーキ定食を食べてぇんだよ、ちょっと金貸してくれよ」
「もう、お金を返す気なんてないんでしょ？今日のところはハンバーグ定食で我慢してよ。」
「そんな冷たいこと言うなよ、な？」
そう言うと、過ぎ去ろうとするチキルの肩を力強い腕で掴む。
「離せ！僕はもうお金なんて持ってないんだ！お母さんからのお小遣いもだんだん減ってきてるし！僕だってもっとたくさん食べたいん

だ！」
母親の不倫によって子どもへの愛情が薄れたことは、そのままお小遣いの量にも影響していた。
それまでは普通にリーズナブルなものを食べていれば余りを貯金できていたものが、段々とその額が減っていき、次第には昼食のメニューを変える必要すら出てきていた。
「チッ、悪かったよ。メシ食ったら少しは返してやるよ。一緒に食うか？」
「やめてよ、そんなお金僕が持ってないってわかってるくせに」
店内に入ると、ビフスら3人はテーブル席に座ったが、一緒に座る気にはなれなかったので、カウンター席で水だけ頼んだ。
冷やかしかと思った店主はムッとしたが、子供のケンカだと判断した途端、フッと笑った。
そんな大人の顔にもムカムカしたチキルは、ちびちびと水を飲んだ。
カウンター席に座っていると客のオーダーがよく聞こえる。今日はガタイのいい男たちがこぞってステーキ定食を弱火でじっくりと頼んでいる。
この店の人気メニューなのだろうか。
「待たせたな。じゃあ行くか」
支払いを済ませたビフスが戻ってきた。店を出て彼の家に案内してもらう。だが、途中から長い路地裏に入った。
「ねえ、こんな道通らなくてもいいんじゃない？」
「・・・」
だが彼は何も言わずあるき続ける。
2分は歩いたところだろうか。ビフスが声をかけてきた。
「・・・なあ。俺は今までお前にいくら借りてた？」
「そんなこと聞いても、お前に貯金が残っているはずないよね？だから、その分のお金はお前のお母さんに出してもらう。それでいいだろう？」
「・・・その金額はどうやって伝えんだ？ただ言うだけじゃ信じてくれ

ねえだろ」
　その言葉に対し、勝ち誇った顔でチキルはカバンの中から1冊のノートを取り出す。
「だから、お前がお金を返さなくなってきた頃からレシートと、その裏に貸したお金の金額を書いてまとめていたんだ。渡したお小遣い以上のものを何回も食べてたら、さすがのお前の母さんも怪しむだろう？」
　だが、参っただろう、と言いたげなチキルの顔を見てもなお、ビフスは冷静であった。
　時として強者は、弱者の努力を一瞬にして踏みにじる。
　ビフスは予想があたったことに優越感を覚えながら舎弟に命令する。
「ふん、やっぱりそういうことか。・・・やれ」
　チキルの後ろにいた舎弟の一人が、肩からぶつかってくる！
　たたらを踏んだチキルはなんとかバランスをとるために出した左腕を、横にいた舎弟に捕まえられる。
　さらにビフスがノートに手を伸ばすが、何をされようとしているか理解したチキルは、唯一の武器であるノートを取られまいと右腕で抱えるようにして持つことで、その手を回避した。
　その手でノートを取ることはできなかったが、両手がふさがったことを確認したビフスはニヤッと笑い、ジュニア級ボクシングで鍛えた右ストレートを、ノーガードとなったチキルの顎に当てた。
「っあ・・・」
　脳を揺らされたチキルは、一瞬意識を飛ばされる。右腕が緩んだスキにノートを回収されると、支えになっていた左腕を放され、地べたにダウンする。
　舎弟二人は心底小馬鹿にした顔でチキルを足蹴にする。そのショックで覚醒したチキルの眼の前でビフスは、ポケットからライターを取り出し、ノートを燃やした。
「ああっ、ああああ！」
「そんな大事そうなもの見せびらかしてきたら、欲しくなっちまうだ

ろう？さあ、これで証拠はなくなった。」
燃え盛るノートを倒れたチキルの前に投げ捨てた。チキルはそれに手を伸ばすものの、その熱さにすぐに引っ込めていまう。
「これでどーやって信じてもらうんでしょうねー？なんなら灰でも出してみるか？」
ついには涙を流したチキルの顔を見て、ギャッハッハッハとひどく不愉快に笑うビフスたち。ひとしきり笑った後には、もはや本の原型は残されていなかった。
絶望で心が支配されたとき。

風が吹いた。
それを背中に感じた。
子どもを叱る母親のように暖かく、断罪の刃のように冷たく。

ビュオォオオォと、台風の日のような音を立てながら、路地裏に空気の壁とも言えそうな風が吹く。
もとより倒れ伏しているチキルはともかく、立っていた3人は突然の事態に慌てふためく。
「（ビュオォオオォ）っ！」
「――――ッ！」
互いに声をかけ合うも、叫んでも、もはや隣り合う仲間とも意思疎通ができない。
3人が開いた目にはすぐにゴミが入ってくるので、彼らは言われるまでもなく目を閉じた。
チキルの後ろからガラガラと路地裏に積んであった空箱が崩れる音がした。チキルはとっさに両手で頭をかばう。
ドッガッと何かがぶつかる音が2つ聞こえた。自分にもぶつかってくるかもしれない恐怖に、思わず目を強くつむってしまう。
何十分とも感じられた風が収まり、ようやくチキルは顔を上げて、目を開けた。
眼の前には仰向けになって動けなくなっている舎弟二人と、ぶつ

かったと思われる木箱が２つ。二人は完全には気絶していないようだが、すぐには動けそうにない。
　チキルは立ち上がり、そして異変に気づく。
「ビフス・・・？あいつはどこにいった？あのデカブツが吹き飛ばされた？」
　一本道になっている路地裏の奥を見渡すが、ビフスの姿はどこにも見つからない。
　人が隠れられるようなスペースもないし、ゴミの山もない。
　いなくなってしまったのだ。
　あの憎いあんちくしょうはいなくなったのだ。
　それがわかったチキルは、深刻な事態だというのに、なんだかわからないが、喉の奥から笑い声を漏らしていた。
　そして、うめき声を上げて倒れている二人を背に、チキルは家路についた。
「いい気味だ」

Ｓｔａｇｅ３．　陪審員は自分勝手

暗黒大陸調査団からの緊急通信を受けたネテロは、このような事態に陥った時にも信頼できる、元十二支んの一人に電話をかけていた。自分だけでも対処は可能だが、それでも武闘派として会長となった面があるため、未知との遭遇に対して最善の手を打ちたかった。そのためには、多少情報漏洩のリスクをとってでも彼と連絡を取るべきだと考えたのだ。

ジン＝フリークス。二つ星の遺跡ハンターとして名を残す、最高クラスのハンター。その業績から未知との遭遇には一日の長があり、また、ネテロの信頼する人物の中で最も暗黒大陸に詳しい人物の一人である。

その会話の詳細は割愛するが、対応は以下のように決まった。

敵対関係にならないこと

画像データから奴は人間の姿をしている。多少の知能を持っているのではないかと期待できる。希望的観測でしかないが、交渉することも可能かもしれない。また、それができるほどの知能を持ち合わせてない場合でも、後述の理由で人類への被害は最小限に収められるだろう。

暗黒大陸の生物の能力は未知数だ。どれだけ強力なハンターを揃えて正面から立ち向かおうとしても、初見殺し能力を持っていればすぐさま壊滅する。無差別テロに適した能力を持っていれば、殲滅対象として認識された時点でアウトだ。そのためには、初対面で刺激を与えることは避けたかった。

捕食者であること

暗黒大陸からわざわざここまで飛んできたのは、暗黒大陸の獲物が口に合わなかったからだと推測した。無論、そうだと決め付けるわけではない。人間の土地を侵略しに来たとか、暗黒大陸にある秘境からの移住計画に向けた大使の路線も考えたが、まずないだろう。

そして、奴の身体の小ささから、相当な偏食家でもない限り、食事

は多くても1日5人程度だろう。ネテロとしても断腸の思いだったが、それで奴の動向を図れるならば安い、とのことだ。
捕食者としても、その対象が人間ではなく、加工食品などの物資を求めた場合に備えて、ネテロが個人的に食べたいと言う名目でいくらか取り寄せておいた。
だが後日、調査隊が上陸に成功したことで、捕食者の線は薄くなった。
奴を発見した調査隊が、過去に渡航した末に音通不信となっていた調査隊のキャンプ地を見つけ、その中で奴のものと思われる新しい下駄の跡と黒い髪の毛、カラスの黒羽を発見した。
髪の毛と羽は検査の結果、人類に有害な毒素はなかったため、ウィルス感染のリスクは少なくなった。食料は缶詰めの一部につい最近開けて食べたものがあった。下駄の跡は森の中からキャンプ地、海岸に続いており、船の錨の痕跡と奴の進行方向と一致していることが確認できたため、奴は人のいないキャンプ地の亡骸を見て飛んでいったということだ。
これにより、高い知性を持つことや、人間を知っていて接触しに来た可能性も大きいと考えられる。
人肉を漁りにきた可能性は小さくなったが、依然未知数の相手。とりあえずネテロは知り合いの料理ハンターに予定を空けておくように手配した。
情報の拡散はネテロの信頼するハンターに限ること
事を大々的に報道するとして得られるメリットは、国軍の支援を受けられる事、何も知らない住民を避難できる事。
前者については、人間サイズの飛行物体に対して有効な大型兵器を作ってない事、さらに言えば、もしあったとしても奴に対して先制攻撃を成功させたところで、撃墜できる確証がなかった。一応、サーチライトをつけて堂々と索敵できるメリットもあるが、相手に刺激を与える行為は避けたかった。〝貧者の薔薇〟で上陸前に絶命させることも考えたが、国を害するかもしれない怪物に対して、確実に国を滅ぼす兵器を使うなど本末転倒だ。

住民の避難に関しては、全ての住民が確実に避難を開始する警報でなくてはならない。そして、そういった警報は〝ほぼ間違いなく街が壊滅する災害〟でなければ、人は動かない。街に殺人鬼がやってきたとニュースで伝えたところで、対岸の火事だと思う人が必ずでてくるはずだ。

第一、避難を呼びかけたところで、奴は暗黒大陸から人間の住む大陸までやってくるほどの情熱を持った者だ。力のあるハンターで足止めしたところで、内陸まで侵入された時点でアウトなのは部が悪すぎる。

一番最悪なのは、リターンを得ようとする他国のハンターによって混乱状態に陥ることだ。足を引っ張り合うことになれば、貴重な戦力を喪失してしまう。

どうしても監視の目は薄くなるが、重要な部分は隠しつつ、上空に不審物がないか注意するように呼びかけることで妥協した。

要するに、先制攻撃はせずに様子見に徹して、あわよくば先に捕捉しようということだ。

万が一人に危害を加えるとしても、その被害は

到着予定時刻はちょうど日が沈んでいる時間帯で、情報の拡散を制限している影響で堂々とサーチライトをつけることができないため、光源も少なかった。

覚悟はしていたが、残念ながら次の日になっても見つけることはできなかった。

ジンは元々奴の到着予想日から半日遅れて現地入りする予定であったので、周辺の探索および聞き込みをしていた。

すると、収穫があったとのことで一時戻ってきた。

「ようジジイ、邪魔するぜ。ビーンズ、この場所の監視カメラの映像出してくれ」

「何があった？」

ジンはビーンズに見せていた端末の画面をネテロに見せた。路地裏の写真と、写真を撮ったときの位置情報が示されている。
「この場所は？」
「偶然見つけた。この場所だけ強風が吹いたみたいに砂が巻き上げられていて、積み上げられていた木箱やゴミも崩れていた。
過去の気象情報でも気圧は安定していて、嵐が起こっていたわけでもないらしい。放出系か変化系の発の練習かと思って一応”凝”をしてみたが、念能力によるものではなかった。不自然な自然現象だと思わないか？」
凝はオーラを目に集中する念能力の一つである。
主に念能力による文字の解読や、発を見えなくする隠を見破るために用いられている技術だが、これによって念の影響を受けたものであるかを判別雨することができる。
今回は路地裏に対して使ったが、念能力以外の力によってなされた現象であることがこれでわかった。
「映像出ました！それでは、２日前から早送りで出してみます」
ーーーーーーーーー
ビフスのやつがいなくなった次の朝。
あの日家に帰った僕はお母さんにケガについて聞かれたが、適当に友達とケンカしたと返したら、そのあとは興味なさげに解放してくれた。
なかなか寝付けなかったが、次の日の朝は早く起きていち早く地方新聞を確認した。あの強風についての記事はどこにも見当たらず、行方不明になったビフスのことも書かれていなかった。
あの時の風は夢だったのだろうかと思いながら学校に行った。
いつもと変わらない日常。
だけど、あのビフスだけがいなかった。
先生には何も連絡がいってないらしい
舎弟の二人は他のクラスだし、名前も知らない。今頃何をしているのだろうか。

放課後、スピーカーから呼び出しがかかった。
『チキル＝ハーブくん、チキル＝ハーブくん、至急応接室に来てください』
どきりとした。怒られるかもしれない。
でも、僕は何も悪いことはしていない。そう自分に言い聞かせて、重い足取りで向かった。
「失礼します」
「こんにちは、チキルくん」
中に入ると、そこにいたのはＰＴＡ会長、そしてビフス＝カルヴィンの母親であった。母と一緒ではない時に会うのは初めてだ。
カルヴィン夫人はにこやかに、自分の子供が行方不明になっていることなど知っているはずなのに、それを気にかけない態度で話しかけた。
「さあさ、ここに座って。紅茶は甘い方がいいわよね。私、ちょっとあなたとお話ししたくてこっちにきたの。」
ティーポットから紅茶を注ぎ、飲むように勧められた。
「いただきます」
「礼儀正しい子ねぇ。私、そんないい子ちゃんのチキルくんのこと知りたいの」
そんな夫人の優しい笑顔と紅茶の甘さに安心感を得たチキル。小さい頃から父親がいなかったこと、お母さんが頑張ってくれたこと、学校生活の話になった。
気の弱い性格でさみしい思いをしていたところに、ビフスが声をかけてきたこと。
豪華な昼食にするために自分からお金を借りてきたこと。そして、約束通り借りたお金より多くのお金を返してくれたことを話した。
「そう、十分おこづかいをあげていたと思っていたけど、もっとあげればよかったわね……続けてちょうだい。」
はじめはこれ幸いと、お願いされたら貸してあげることにしたこと、増えた分のお金はなるべく貯金したこと、
彼のことを信頼していたことを話した。

「えらいわね、子どもなのにちゃんと貯金しているなんて」
それまではよかったんだと。
そのうち、お金を貸しても帰ってくるまでの期間がながくなっていき、最後には貸した金額も忘れて、返さなくなってしまったこと。増やした貯金が減っていることに気付いた時にはもう信頼できなくなったんだ、と話した。
「・・・それで？」
それからは、彼の分の領収書をもらうようにして、ノートに貼り付けて保管することにした。レシートの裏には自分が貸した金額もメモするようにして。ビフスに催促はするけど、貯金したお金は元々は彼のお金だから、貯金がなくなった時はビフスのお母さんに払ってもらえるようにするために。
「そのノートは今持っているの？」
そのノートを昨日の夜夫人の家に持って行って、せめて減った分のお金を返してもらえないかと言いたかったけど、ビフスに見つかって殴られて、無理やり燃やされてしまったのだ。
そして地面にうつぶせになって泣いている間にものすごく強い風が起きて、目を開けたらビフスが目の前からいなくなっていた。
「それが今まで起こったことです」
「うちの子が憎かったの・・・？」
「正直、嫌なやつでした。」
そうだ。
いなくなってせいせいした。
お金を借りていた証拠はなくなってしまったけど。
それでも、もうお金のことなんてちっとも・・・少ししか、気にしていない。
「だからって・・・だからって！お金がほしかったならいくらでもあげたのに！どうしてビフスちゃんを殺したの！」
「えっ　えっ？」
「私聞いたのよ!?うちの子の友達から！うちの子がいなくなったあとに『いい気味だ』なんて言ったって！」

「それはっ、そういうことじゃなくて」
自分がやったことじゃない、あれはただの事故だ！
「それに、あなたのお母さんにも聞いたのよ！今朝は早起きして自分から見たことのない新聞を取りにいったって。あなたが犯人なんでしょ!?」
「違う、僕じゃない！僕がやったことじゃない！」
勘違いされている！どうにか落ち着かせて、そんなこと僕にできるはずがないって伝えなきゃ！
「もう警察も呼んであります。言い訳は警察署でしてきなさい！」
カーテンで仕切られていて見えなかったけど、外からサイレンの音が聞こえてくるのに続いて赤いランプがカーテンを点滅させていた。
大人が大股で歩いてくる足音が聞こえる。もうすぐそこまで来ている。
応接室のドアがノックされた。
来ないで。
どうして。
なんで。
嫌だ。

その後僕は警察官に手を引かれ、校庭に止めてあったパトロールカーに入れられて、市の中央にある大きな警察署で事情聴取をした。
夫人と違って警察の人は冷静に話を聞いてくれた。だがそれだけだ。子ども一人だけを攫っていく強風が何の前触れもなく起こるなんて話は信じてもらえなかった。
それでも記録はされて上司に報告はされた。すると、それから１０分もしないうちに質問してきた人が戻ってきた。
「これからあってもらいたい人がいる。一緒に来てくれ」
どうやらまたパトカーで移動することになったらしい。
案内する人に連れられて外に出た。今回は手を繋いでいないが、後

ろにも警察官がいる。
逃げ出したかった。どうしてこんなことになってしまったんだろう。全部、全部あの風のせいだ。
いっそ、あの風がまた吹いて、僕をどこかに連れて行ってくれないか。
ビフスのやつはどうなったんだろう。あんちくしょうの顔は見たくないけど、ひょっこりとでも顔を出してくれればそれで解決するのに。
「急に冷えて来たな。さっさと車に乗り込むぞ」
そんなことを考えていたからだろうか。
風が吹いて来た。
あの時と同じだ。
あの時より冷たい風だ。

小石や砂が巻き上げられ、パトロールカーがガタガタと揺れる。前にいた人は右向きにかがんで飛ばされないように踏ん張り、後ろにいた人は左手をあげて砂利が目に入るのを防ぐが、強い風で目が乾くのか、薄目でまばたきを繰り返す。
反面、僕は巻き上げられた砂を目にして、風の音を聞いてようやく強い風が吹いていることに気付いた。
学校で習ったことがある。台風の目という現象があって、渦巻いた強い風の中心には風が吹かないらしい。
さらに周りの砂や花壇の土を巻き込んだのか、夕焼けで浮かび上がった影でしか前後に人がいることを確認できなくなった。
突然脇の下に腕をいれられた。
後ろの人に捕まったのかと思って振り返ると、真っ赤な顔に長い鼻の、怒った表情の顔があった。いや、お面か。
「何・・・うわっ！」
脇の下に入った腕から上に持ち上げられ、足が地面から離れる。
自分がもっと小さい頃、たかいたかいと上に放り投げられた時と似ているが、そうじゃない。持ち上げられている腕が上に上がり続けて

いる。
後ろで僕を抱えている人が、空を飛んでいる！
垂直に浮かび上がった体は警察署の３階ぐらいの高さになると、斜め上にまっすぐ飛んでいった。
「!?　子供はどこに行ったの!?」
「まさか、本当にあの少年がこの風を起こしたというのか!?」
その声は風にさえぎられてもはや少年には届いていなかった。
そして、この事件は念能力者が公共の場で罪を犯したときと同じように、その詳細を闇に葬られることになった。

昨日は人間の子供をさらったというのに、その場にいた子供が話題を広めなかったのか、畏れ、妖怪としての認知度がほとんど得られませんでした。仕方ないので今回は大人のいるところですることにしました。
「放せ！どこに連れていくんだ！何をするつもりだ！」
少年が声を張り上げはじめました。できれば腕の中で暴れないでいただきたいのですが。
空を飛んでいると先程から白いもやがかかったようになっています。そこまで濃くはないですが、人間にはどこを飛んでいるかわからないでしょうね。
「今放したら絶対に落ちて死んじゃいますよぉ。どこに行くかは、人気がないところなら本当はどこでもいいんですが、山の中です。どうするかっていえば・・・実は君を攫った時点でもう目的は達成しているんですよねー。」
懇切丁寧に教えてあげる。妖怪は知名度が命。知られたがりなのだ。
「達成して・・・いる？」
「そうです。畏れを得ること。私のことを世界に知らしめること。そのために、あなたのような子供をさらいたかった」

「僕のような・・・?あの時、ビフスがいなくなった時に一緒にいたからじゃないのか?」
「おやおや、一人目の関係者、もといあの場にいた子供でしたか。これは偶然ですよ。何の関係もありません。なぜあなたをさらったかといえばですね。
親から見捨てられた子は天狗にさらわれる。
それを知らしめたかっただけですよ」
「そっ、そんなことのために・・・そんなことのために、僕らをさらったってのか!?それに、ビフスはお母さんから大切にされていた!自分の子供のために怒っていたんだぞ!」
「あなたにとってはわからないでしょうが、そんなことは我々にとっては死活問題なのです。そして、見捨てられたかどうか、わたしにはわかるんです。おおかた、その親は子供のことを子供として見ていなかったのでしょう」
事実、夫人は自分のできの悪い子供を愛していなかった。
お金を出してあげるのも嫌だったが、うるさくされる方が嫌なのであげていただけだ。
怒っていたのは、どこの誰とも知らない誘拐犯だと警察に言われて反故にされ、賠償金を得られないのは惜しいため、身近な容疑者を攻撃しただけ。
愛しているが故の行動ではなかった。
「あなたからも、親から見捨てられた気配がします。せっかくの空の旅です、少しばかり話を聞かせてくれますか?」
「もういいよ、僕の話なんて。今日だけで3回も話す気はない。それよりも」
少年幾分か落ち着いた様子だ。無力な自分を悟ったのか。
(あの時・・・もっと強ければ・・・知っていれば・・・考えていたら・・・こんなことにはならなかったのかな・・・それなら)
「ぼくも、おまえみたいになれる?」
両手がふさがっているので、天狗の面の長い鼻で少年の頭を小突く。

「あいたっ！」
「人に何かを頼むときはもっと丁寧に話すべきです。それとわたしにはおまえじゃなくて、射命丸文という名前があります」
「シャメイマル＝アヤ？変な名前」
　二度小突く。
「痛い!?」
「外国の名前だからです。名誉毀損ですよ。まあ、考えておきますよ」
「本当!?ですか！」
「それはこれから決めることです。さあ、着きましたよ」
　樹が生い茂る山に降り立つ。
　当然ながら、人の気配はない。
「これから、とりあえず・・・一週間生きているなら、天狗になるためのけいこをつけてあげます。ここで死ぬようでは、とうてい天狗にはなれないでしょう」
「わかりました。ここで生きていればいいんですね？」
「ふふ、ここで一人で生き残れるというのなら。わたしはどこか別の山にいます。では、さようなら」
　文は羽を広げ、また空に飛んで行った。
（あの目は、まだ自分が生かされているという自覚がない目だ。人の勝手で生まれ、人の畏れで生かされている妖怪も、支え支えられて生きている人間も同じだ。人間が造った生き残るための道具すらない子どもでは無理でしょう。生き残りたいなら、体力があるうちに下山して民家を探すのがいいでしょうが）

　だんだん暗くなってきた。夜になれば山の中では月と星の明かりしか存在しない。だがここにきてチキルは何をすればいいのかわからなかった。
　火を起こせばいいのか？
　水を探せばいいのか？

生えている草は食べられるのか？
そのどれにしても、どうやって実行するのかすらわからなかった。
「自分には無理だと言えば良かったのかな・・・いや！どうにかする！きっとなんとかなる！・・・はず・・・」
情緒が不安定になるチキルの足元に、一匹の獣がやってくる。
「きゅぅーん」
クマのような見た目をした動物の赤ん坊は、群れからはぐれて寂しがっているのか、チキルの足首を舐める。
「お前も、お母さんに見捨てられたのか・・・？」
獣の前足を持って抱きしめる。警戒心というものを知らず、無知な存在は、今、今までの自分を思い出す。
学校で昼食を食べてからしばらくする。もうすぐお腹もすく。
少年には肉を処理する方法を知らない。刃物もない。処理するという概念もない。
殺せば食べられる。
なんの理屈もない突発的な思考だった。殺してもなんにもならないのに、無駄な躊躇すらした。
腕を頭より高く上げて、思いっきり振り下ろそうとした、その時。
草むらから母親熊が、奇しくも同じ構えで、少年に爪を立てて襲いかかった。

Ｓｔａｇｅ４（前）・　追跡者（ハンター）

母熊の爪が立てられ、我が子を殺そうとする少年に向かってその腕を振り下ろしたその時。
少年の周りにあった白いもやの濃度が上がり、それは人の形をした煙になった。
チキル少年の目の前で煙人形は腕を頭の上でクロスさせ、強烈な熊の一撃を防いだ。
「えっ・・・何、これ？」
「無事か、ボウズ？」
山道を歩いてきたのは、巨大なキセルを肩に乗せた、サングラスの大男だった。
いつのまにか子熊はチキルの手を離れ、母グマの元へ帰って行った。
母グマはなおも報復しようとするが、大男がキセルを勢いよく地面に振り下ろして威嚇すると、踵を返していった。
「だ、誰？」
大男はチキルにつかつかと歩み寄ると、その手で思いきり（少年の目からすると）ビンタした。
「バカヤロウ！死にたくなきゃクマの子に手ェ出すもんじゃねえよ！」
「ご、ごめんなさい・・・」
チキルは痛む頬をさすりながら立ち上がった。
「強くなりたかったんだろう？なら、こんなところで死ぬようなマネすんじゃねえよ。あぁ、俺はモラウ。お前がチキル＝ハーブだな？」
「どうして僕の名前を？」
「お前をさらっていったあいつのことを探していたからだよ」
ネテロはザバン市近郊で起きた事件、事故をどんな小さなことでも報告させていた。
その時、警察署の事情聴取はドンピシャだった。
すぐに詳細を調べるべく、ハンター協会に召集させていたところ、

奴にさらわれた。
それを知ったネテロは同じく召集していたモラウに連絡を取り、モラウがすぐさま自身の念能力の紫煙（ディープパープル）拳を発動。
ザバン市上空にもやと錯覚するほどの薄い煙の結界を張り、上空の敵を感知していたのだ。
山に降り立ったのを確認したのでモラウは登山を開始、見事チキルを守ることに成功したのだ。
「あいつって、シャメイマル＝アヤのこと？」
「!?その名前は誰かから聞いたのか？」
「その人が教えてくれたんだ」
チキルはモラウに射命丸文との空の旅の中での会話を教えた。
天狗という妖怪であること。
畏れを得るという目的。
親から見捨てられた子供が連れ去られるというターゲットの共通性と理由。
それが死活問題ということ。
「シャメイマルは1週間後まで生きていたらけいこをつけてくれるって言ってた。ここで待ってたら来てくれるかな？」
「それは一人で生きていたらの話だろ？ついでに奴の口ぶりじゃもともと期待していなかったと思うぜ？まあこのまま何もアプローチがないなら待つ意味はあるかも知れねえが」
「うわっ！」
そう言うと、モラウはチキルを米俵を扱うかのように抱えて下山した。

ーーーーーーーーー

モラウは念のためチキルを暗黒大陸からの帰還者用の診察室にぶち込み、ハンター協会でチキルとの会話内容をネテロとジンに伝えた。
「なるほど、シャメイマル＝アヤと名乗る、天狗の妖怪？心当たりはあ

るかの、ジン？」
「妖怪ってのはジャポンにで語り継がれているバケモンの伝承だな。天狗ってのはよくわからねえが。畏れを得て生きているってあたりは間違いねえと思うぜ」
「畏れたぁ恐怖とは違うのか？」
　モラウはその時はわかったふりをしていたが、正直に言えば話半分に聞いた内容をそのまま話しただけだ。
「似たようなものだが、厳密には違う。恐怖のほうの恐れは、自分の命の脅威に対して逃げ出したいとか、対処したいと思える気持ちだ。それに対して畏れは、脅威に対して抱く気持ちには変わりないが、そこには敬う気持ちもある。自分にはその脅威が襲って来て欲しくないが、世の中には欲しい啓蒙活動、みたいな感情か。だれが言い出したか知らねえが、かなりあやふやな意味の上、今じゃ使われない言葉だからな」
　現代ジャポンには純粋に妖怪と呼ばれる存在はいない。伝承に残っている限りで、すでに忘れ去られてしまったものだ。
　妖怪と称されるものはいても、人間に認知されなければ生きていけないような不安定な存在は、科学の発達した現代ではナンセンスだった。
　多くの弱小妖怪は大人から子供に、「悪いことしたら妖怪○○に食べられちゃうよ」「夜更かししたら・・・」「人のものを盗んだら・・・」のように、教育的な一面を持っていた。そういったたとえ話で教育する時代が過ぎ去ったが故に、消えてしまったのだ。
「教育にいい奴ってことか。じゃあ奴、シャメイマル＝アヤは放っておいてもいい奴なのか？」
「言いにくいからアヤにしよう。ちなみにジャポンでは姓を前に、名を後ろに言う。妖怪にもいい奴もいれば、悪いことしかしない奴もいるって話だ。それにアヤが伝承通りの妖怪とも限らねえ。なんせ暗黒大陸からやってきた化け物だし、念能力みたいな力を使う。さすがにハンターとして放置とはいかねえな」
　鬼などは退治されるための存在と言われるだけあって、その思想や

行動は悪そのものだ。天狗がそれに連なるものの可能性はある。
　それに文が言った、親に見捨てられた子供を連れ去るのを繰り返されれば、孤児が生き残ることができなくなるし、どんな行動が「子供を見捨てる」と判断されるかわからない以上、そんな町に移住する大人もいなくなるだろう。
「何にしても、ひとまずは会ってみるのが一番じゃな。幸運にもアヤが理性的な存在ということは確認できたから、ジャポンから来た妖怪と同じなのかも含めて事情を聞き、交渉して代替案があるかどうか、無いとしてもどこまでがアヤが人をさらう基準になるかぐらいははっきりさせておいたほうがいいじゃろ」
「それで終わりか、ジジイ？」
　ネテロが締めようとした時、ジンが口出しして来た。
「ここは密室だ、言いにくいことも言っちまっていいんだぜ？交渉だけで終わるはずがないだろ？」
「・・・まあお前らなら言ってもいいか。いずれアヤが暗黒大陸からやって来たことはバレるだろう。そうすれば他国からの干渉は逃れられん。場合によってはその場でアヤを殺すこともちろん考えておる。奴と会って、あまりにもリスクがでかいか、リターンがまるでないか、かつ、殺せるようなヤツじゃったらな。もしワシより強いってんなら、隠居して貰うしかないじゃろ」
　殺す分には手はないことはない。人類最強最悪の武器として、貧者の薔薇（ミニチュアローズ）という爆弾がある。これは人の体に仕込めるほどの小さなものでありながら、周囲のものすべてを巻き込む爆発力と、あらゆる生物を殺す毒を両立している。だが、その爆発力もさることながら、その毒には感染性があるため、多くの犠牲者を生み出した歴史がある。すでにザバン市に住み着いている現状で使うことはできない。
「話は脱線したが、後は会う方法だな。アヤはあの山とは別の山にいるって言っていた。俺の念能力、紫煙機兵隊（ディープパープル）でしらみつぶしに探すか？」
紫煙機兵隊（ディープパープル）は煙人形を操る能力で、大雑把に大量に生成して物量作戦をしたり、逆に少数精鋭を作り出すことができるなど、その汎用性は

高い。
「お主の紫煙機兵隊（ディープパープル）は煙を操る能力。捜索が目的とはいえ、やむを得ず戦闘になれば風を操るアヤとは相性が悪いじゃろう。それに今回のターゲットはなるべく刺激したくない。できれば餌で釣ってあっちから来てもらうのが一番じゃ」
「餌って言えば奴が言ってた、親に見捨てられた子どもか。俺には心当たりねえが、なんか考えてるか、ジン？」
その言葉にジンは「一応な」と言って、ハンター協会のデータベースにアクセスし、今回のハンター試験に応募している名簿を呼び出し、年齢でソートした。
１５歳以下の「子供」と言えるような志望者はいないと思えたが、確かに存在した。その中には、ある名前が存在した。
「俺はゴン＝フリークスを親として見捨てる。あいつを俺の子として認めねえ」

Ｓｔａｇｅ４（後）・　追跡者（ハンター）

「これからどうしましょうかねぇ・・・」
　文はザバン港ーーー正確には幻想郷には存在していなかった海ーーーを見つめていた。
　ザパァンと波が打ち付ける音が聞こえ・・・ない程度には離れた場所からだが。
　妖怪は人間に比べて長寿であるため、人のように生き急ぐこともない。
「昨晩の実入りが良くないですが・・・今日のところは気楽に行きますかねえ・・・」
　２日前は子供しか私の姿を見たものはおらず、周囲の大人は話を信じられなかったのだろう。
　そう思って昨晩は同じ服装の大人がたくさんいる場所・・・警察と思われるところで目標に合致する子供を見つけたので、それをさらえば事態を重く思った人たちが騒いでくれるはずだと踏んでいた。しかし結果は逆。見なかったフリでもされているかのように情報封鎖されていた。
　ただ、妖力を使ったとはいえ、彼女の力は数年は持つ程度に残っている。児童虐待を受けているような子供達の施設を襲ってまで、一日も早く名を広めたいとは考えられなかった。
　かくして街からかっぱらってきた酒を飲みながら日の出より９時間、ただボーッと海を見つめていると、港に大型の木造の船が着く。どれどれと遠目に見てみると、ぐでんぐでんに船酔いしてダウンした多くの男たちが船から荷物でも運び出されるように扱われていた。
「これはこれでなかなか面白い」と思いながら眺めていると、いかにも船長らしき人と、３人の男たちが下船していた。船酔いしている男たちよりも若いようなので、少し興味を持ちながら観察した。
「スーツ姿の男は成人しているから駄目。かなり俗物的な考え方をしてそうだし、人間代表って感じですね。金髪の子はなかなかね。強い憎しみと誇りを合わせ持っているから、妖怪になったら強くなりそ

う。両親とは死別したみたいだけど、大切に思われていたみたいね」
　文は千年を生きる大妖怪であり、鴉の頃より人にあこがれ、人を学び、人を知った天狗である。妖怪として、天狗として人を見る力は常人のそれをはるかに上回っていた。
「そしてあの少年、あの目、あの顔、純粋でありながら貪欲。人間的でありながら妖怪にも近しい、博麗の巫女のような天然のたらしですね。是非とも天狗道に招待したいところですが、それだけに、実に惜しい。どうにもまだ父親から根っこの部分で信じられている。私が最初にいた場所があの少年の近くなら何も気にしなかったものを」
　妖怪というものは種族によって違いはあれど、嘘に敏感だ。特に鬼は自ら嘘をつかず、人に嘘を付かれても手に取るようにわかるという。例外として天邪鬼は常に嘘をついているが。
　そして何よりも、自らの行動を嘘にしない。つまり自ら定めた規則（ルール）を破らないのだ。
　文はこの地に来る前に、天狗としての名前を広めるために『天狗は親に見捨てられた子どもをさらう』と決めた。それを嘘にしないためにも、少年がどれだけ魅力的な人間であっても連れ去ったりしない。
　彼女はふてくされて物見を続けた。

ーーーーーーーーー

「昨日はああ言っちまったが、結局のところ分の悪い賭けになっちまうんだよなぁ」
　昨晩は細かい作戦会議で夜が遅くなってしまった。その時にジンはゴンを餌に使う案を出したが、それだけで文が釣れるとは発案者のジンを含め、誰も思っていなかった。
　そのため、不審者情報を流して子供の個人外出を控えさせ、孤児については可能な限り1箇所にまとめ、スラム街には一般人に化けさせたモラウの煙人形を設置することに決めた。
　また、文の2回の出現時刻は夕方と夜であり、ジンから聞いた妖怪の性質は夜行性であることから、それに向けて会長とモラウは仮眠を

とり、ジンは何かが起きたときのために待機していた。
ビル最上階の窓ガラスから海を眺め、くじら島からの巡回船が到着したのを見つけた。おそらくあの中にゴンはいるはず。
「・・・願掛け程度にもう一回やっておくか」
念能力の説明を避けるための方便として、「燃」がある。
点（テン）・・・・心を一つに集中し、自己を見つめ目標を定める。
舌（ゼツ）・・・・その想いを言葉にする。
練（レン）・・・・その意志を高める。
発（ハツ）・・・・それを行動に移す。
言葉や意志の力を発現するこの技術は「念」を知る前の下準備として知られているが、全くの嘘というわけでもない。
念能力の達人の言葉、「燃」には言霊が宿り、対象を祝い、呪うのだ。
ジンは言霊が宿るとか霊的なものは信じていなかったが、損はないので今一度やってみることにした。
集中する。
対象は自分とゴン。
その関係は親と子。
その関係を否定する。
自分の子供ではない。
だが、それ以上に意志の力を込める。
赤の他人だ。
立場が違う。
名前が違う。
歴史が違う。
目も鼻も口も、肉体も精神も魂も、すべてが違う。
嘘をつくなら自分から。
嘘をつくなら味方から。
世界を味方につけたなら、世界をも騙す。
俺はお前じゃない。
お前は俺じゃない。
「お前は俺にとっての何者でもない」

あの船にいるであろう「あれ」に向けて、「あれ」がいる世界に向けてそう言い放った。
だが所詮は一個人が全力で言っただけの嘘に過ぎない。ジンはそれでなにかが変わるとも思ってもいなかった。
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
少なくとも人の身体で出すことができると思えない音はドップラー効果を伴い、ジンはその音をビルの揺れとともに感じ取った。
慌ててジンは音が聞こえた方向を見ると、映像データと同じ姿形の妖怪少女が船に向かって飛んでいった。
「マジかっ・・・マジだ！おいジジイ！モラウ！来やがった！すぐに支度してくれ！追うぞ！」

何が起こったかわからないが、あの少年から親の気配が消え去った。
何が起こったかわからなくとも、それだけがわかった瞬間、文は空を飛んでいた。
常識的に考えれば罠以外の何者でもない。
だがそれでもいい。それ以上にあの少年は極上の囮であった。
何よりも面白そうだ。たとえその結果人間の手によってその生命を落とすしても、彼に関わりたいと思えた。
それほどに彼が人間として、妖怪にとって魅力的だった。
立ち向かってきてもいい。今は無理でも近い将来、彼によって打ち倒されるならそれでもいい。
だが、願わくば。
「同じ天狗として生きていきたいですねぇ・・・！」
空を飛びながら山伏の格好に似た天狗装束を身にまとう。
その顔は天狗の面を被るまでもなく、酔いつぶれた男のように、恋い焦がれた少女のように赤く火照っていた。
懐より葉団扇を取り出し、一度振るう。あたりにそよ風が吹く。

少年はこのときより異変を感じ取っており、後に「潮の香りじゃなくて、秋の山で風が通り抜けたような匂いがした」と評している。
ふたたび振るう。急に強い風が吹いたことに港は異常を感じ取る。
船の帆をしまうべく、船員が駆け回る。
三度振るえば嵐が吹き荒れる。
その中心にいたゴン以外はもはや立っていることもかなわない。

ゴンは周りの人が強い風に耐えているのを見た後、その原因を探るべく周りを見渡した。
そうすると視界の端、上の方に人影を見た。未知の敵、何をしてくるのかわからない相手に対し、恐怖しながらも勇気を持ってその姿を見た。
(あぁ、良い！その目！弱くともその中にある強さ！その光にどうしても惹かれる！)
文は笑みを深める。酒によって茹だった頭はテンションを際限なく高め、ついには目は見開かれ、口角は頬が裂けるほどに上がっていた。
お面をかぶっていればまだマシだったものを、猛スピードで近づくその顔を見たゴンは、恐怖が上回った結果わずかに目を閉じてしまった。
それを見て文は人間の体に重大な害を及ぼさない程度に速度を緩め、我が子を扱うように優しさを持って、しかし傍から見れば乱暴に、ゴンを空の旅に連れて行った。

「なんだったんだ今のは・・・」
「無事か？」
風が弱まり、嵐が去ったのを確認したクラピカとレオリオは周りの人の安否を確認した。
「俺は問題ねえ。一応近くにけが人はいねえな。船の方は大丈夫か！」
レオリオがそう呼びかけると船長が中から出てきた。

「大丈夫だ！ちょいと頭を打ったやつがいるぐらいだ。なんてことはねえ」
「頭はやべえぞ、後々響いてくることもある！診断するから今からそっちに行く！」
　そういってカバンをとったレオリオは船に乗り込んだ。
「やれやれ、とんだ災難だ。・・・ゴンはどこだ？」
　クラピカはこういうことがあったら心配するよりも興奮してはしゃぎそうな隣人の姿が見えないことに気づいた。
「ゴン！何処に行った！まさか、これもハンター試験だというのか!?」
「何があった？」
　黒いスーツにこれまた黒いサングラスをかけた男が寄ってきた。
「誰だお前は!?」
「まあ落ち着け。私はハンター試験監視員の者だ。ゴンという者がいなくなったことに我々は関係していない。私は今しがた来たところだが、状況を教えてくれないか？」
　クラピカは監視員を名乗る男に不信感を覚えながらも、先程起こったことを簡潔に説明した。
「わかった、彼は我々の方でも捜査することにしよう。最近になってこのあたりに不審者が出没したらしい。親と離れ離れになった子どもを狙うらしいので、君も気をつけるように」
「協力感謝する（ゴンは船の中であったきりの関係だが、いなくなったらやはり気になる。人徳のなせる技ということか）」
　監視員の背中を見送りつつ、クラピカはけが人の手当をするレオリオを待つことにした。

（不味いな、ジンさんはこのことを把握しているだろうか？）
　ハンター試験監視員を名乗るこの男は、実はそうではなく、ゴンを監視するべく急遽ジンから依頼された幻獣ハンターだった。
　その念能力、『狩人の探知玉（ペイントボール）』は自身のオーラを混ぜた玉を対象に当てることで、しばらくの間方角と距離を知ることができる。さらに彼の持ち前の空間把握能力によって、対象が地図上の何処にいるか正確

にわかる。
普段は幻獣を相手に使用し、その生態を知るための能力だが、今回はゴン及びその他の文の対象に選ばれそうな子どもに通りすがりを装って使う予定だった。
「あのビルの最上階にいるはずだし、あの音だったら流石に気づくだろう。まあマーキングする前にターゲットが出てきちまったんなら仕事はオジャンかぁ。しゃーねえなあ」
彼は頭をボリボリとかきつつ、ジンの携帯端末にメールを入れておいた。

Ｓｔａｇｅ５（前）・　化け物共（フリークス）の逢瀬

文によって空の旅に連れて行かれたゴン。当然すぐに暴れたが、空中では地の利がある文にうまくもてあそばれ、もはや落ちれば命の危険がある高さになった頃には諦めた。そして、その目には涙が浮かんでいた。

「食べられちゃうのは嫌だな・・・」

「えっなんで食べられると思ったんですか？」

「だって、親鳥が小鳥にあげる餌みたいじゃん、今のオレ」

そんなやけにリアリティのあふれる可愛らしい理由で泣いていたことに文は思わず笑ってしまった。

「危なっ！離さないでよ！」

「大丈夫、あなたは美味しそうですがそんなもったいないことしませんよ」

「美味しそうなんだ」

「食べませんよ」

そう言われるとゴンは安心して一息ついた。

「そういえばさ、ザバン市に出たっていう不審者って君のこと？」

ゴンからは見えないが、文の表情が固まった。

「不審者と来ましたかー。ちなみにそれはどこから？」

「船から降りる前に船長から聞いたんだ。ザバン市の近くで誘拐事件が立て続けに起こっているって。その謎の不審者のターゲットが子どもばかりだからお前も気をつけろって言われたんだ」

ゴンは自分を掴んでいる腕が震えているのに気づいた。

誰だって覚えがないのに不審者なんて言われたら嫌になるだろう。いや、もしかして違う人!?

「ごめん！もしかして人違いだった？」

「人のことを謎の不審者呼ばわりとは！それぐらいだったらあの場で見得でも切っておくんでした！」

ソッチのほうか～と言わんばかりにゴンは呆れ顔になった。

「見得を切るって？」

「名乗りを上げるということですよ。そうですね、今回で言えばこんな感じで・・・」
　文は山の中に降り立ち、ゴンを下ろしたかと思えば、ポーズをとりだした。
「我は幻想の民にして、この地に降り立った妖怪である！
我らは人のためにあり、人のために仇なす者である！
我らは天狗！我が名は射命丸文！
我が天命において、この少年は貰い受ける！・・・といった具合でしょうか」
　言った後、文は酒で火照っていた顔をさらに赤く染めた。考えて言ったは良いものの、やはり恥ずかしくなってしまったようだ。
　目の前の少年を見ると、顔を下に向けてぷるぷると震えていた。さすがに笑われてしまったのだろうか。
「あの・・・どうか今のは忘れてしまってください・・・酒に酔った勢いといいますか」
「かっこいい！」
　文は「えぇ・・・」と言わんばかりにげんなりとした顔を見せた。
「今の、オレを下ろす間にずっと考えてたの？」
「私はそんなことを常日頃考えている人じゃないですよ！」
　自己紹介の仕方を常日頃考えているなんてなんとも痛々しいです。
「じゃあ即興で考えたんだ！すごい頭がいいんだね！」
「いえいえ、それほどでも」
　即興というよりは、自らの立場とか生き方をそのまま言葉にしたようなものですが。
「君の名前は射命丸文って言うの？それに天狗？妖怪？君ってなんなの？」
「はいはい、一つずつ説明しますよ。そのとおり、私の名前は射命丸文と申します」
「ふーん、なんだか変わった名前だね。あ、オレはゴン！ゴン＝フリークスだよ！よろしくね！」
「よろしく、フリークスくん・・・いや、外国では名前が先と聞きまし

たね。ゴンくんのほうが正しいですか。ちなみに射命丸が姓で、文が名です」
　人の名前を小馬鹿にしない、なかなかできた子です。
「文は幻想の民って言ってたけど、もしかしてこの国以外から来た人？」
「鋭いですね。私はこの地ではない、『幻想郷』という場所からやってきました。現世において忘れ去られた者たちが集う楽園です。そこには人間や妖怪、神など様々な者がいるんですよ」
「神様って本当にいるんだ！だけど妖怪って何？文も妖怪って言ってたよね？」
「まあ幻想郷にいる神々は貴方の国の神とはおそらく違うでしょう。妖怪というのは人の噂や言い伝え、はてには都合の悪いことを人が適当に名前をつけたなにかのせいにして押し付けた結果生まれた者たちのことを言います」
　小豆を洗う音が聞こえたら良いことが起きたとか、夜の外になにかよくわからない明かりが揺らめいていたとか。
「適当に名前をつけたって・・・普通どうしてそんな事が起きたか調べない？」
「昔の人は生きることに必死で、いちいち起こったことすべてを調べ尽くすほどの自由がなかったんですよ。それよりだったら適当に名前をつけて納得するのが一番楽だったということです」
　それに、そうやって名前をつけられる妖怪は視界が悪い夜に出現するから、子どもたちに夜に出歩かないように教育するのにもってこいなんですよね。
「そうやって人々に語り継がれ、噂が広まった結果、本当に存在するものだと扱われたものが妖怪として形をなしたんです。神も同様ですね」
「じゃあ、神様と妖怪ってなんの違いがあるの？人の想いから生まれたってのは違わないよね？」
「人の想いが形になったのは正しいです。その想いの方向性が違うだけですね。人の恐怖、それを遠ざけたい気持ちが敬う心となり、”畏

れ”となって妖怪は生まれました。神は人の暮らしがこうあってほしいと願う気持ち。農業がうまく行ってほしい、子どもが無事に生まれてほしい時に願を掛ける相手が欲しかった。それが神となったのです」

八坂神奈子は戦の神だし、良いことを願うだけじゃなくて、災厄を溜め込むことで結果的に幸せを呼ぶ鍵山雛という厄神も存在する。そういう意味では疫病神とかは妖怪に近いと思うけど、どんな基準で線を引いたのでしょうか。

若干ゴンの頭から煙が吹き出しつつある。あまり頭をつかうような子じゃないんですね。

「うーん・・・えーと、それで文は文って名前で、天狗で、妖怪で・・・」

「ライオンっていますよね?ライオンはネコ科の動物です。それと同じで、私は天狗科の妖怪って覚えてもらえばいいです」

本当は天狗の中にも烏天狗とか白狼天狗とかいますが。

「わかりやすい!それでね、天狗って何?」

「天狗というのは、簡単に言えば山に住む妖怪ですね。ですが、山の中にいるだけじゃなくて、山を降りてきて悪さをすることもあります」

ただ、天狗の歴史はかなり古くを遡ると、中国で凶事を知らせる流星を意味していました。千年を生きる私でもそこまでいくとまだ生まれていませんが。私は日本生まれの日本育ちの天狗です。天魔様だったら知っているでしょうが。

「でもさ、人のためにあるって言ってたじゃん?子どもをさらっているのにそれは悪いことじゃないの?」

「それが必ずしも悪いこととは限りません。私は親から見放された子どもを狙ってさらっています。薄情な親からは子どもがいなくなっていくのがわかっていけば、自ずと子供のことを大事にするでしょう」

「それが人のために仇なす者ってこと?子どもを大事にしようって言い聞かせればいいじゃん」

「言葉だけでは人は動かない・・・とまあ色々言いましたが、これについては嘘も方便というやつです。本当は順番が逆なんです」

「え？」
「始めは〝天狗の仕業〟と呼ばれていました。巷で起こる不可解な怪異。物がなくなる、怪我をする、突如として風が吹くみたいなちょっとしたことでも、その原因がわからなければすぐに天狗の仕業とされました。やがて、子どもがいなくなった。本当は口減らしのために人為的に起こされたことでも、それを素直に口にだすことはためらわれた。そうやって天狗の悪名は際限なく広まり、我々天狗は生まれたのです」
「全部天狗のせいにされたからって、人をさらう理由にはならないんじゃない？」
「妖怪は人の噂や言い伝えから生まれるというのは、そういうことです。噂を再現するんですよ。首が伸びた女の影が見えたなら、ろくろ首が生まれる。天狗は天狗の仕業という噂を再現するべく生まれてきた。私が天狗であること、それだけが理由です」
　私はそこに罪悪感なんて感じませんし、良いことだとも悪いことだとも思っていません。
　ですが、このくらいの子どもだったら自分の正義をわかっているでしょう。理解される必要はないですが、どんな反応をしたものでしょうか。
「大変なんだね、妖怪って」
「え？ええ、大変なんです」
　淡白ぅ～。それとも素直なんでしょうか？あるいは器が大きい？
「まあ、ということで私のお話は終わりです。ずいぶんと話がそれましたが、ここからが本題です」
　手を広げ、仰々しく歩く。演説をするように、ゴンくんの視線を釘付けにする。
「ごめんね、話の腰折っちゃって」
「いえいえとんでもない、相互理解は契約に大切なことですので。それにこれからする話は今までの話と無関係ではないですよ」
　さり気なく、木陰に場所を移す。光が見えやすいように、これからすることがわかりやすいように。

獣を射抜くだけなら一本の矢で良い。過剰な演出なんて無駄でしかない。
だが、無駄の中にこそ美しさがある。弾幕ごっこはその極みだ。
ならば、無駄の中の美しさを極めた私の演出を見るがいい。
右手を握りこぶしにして前に出し、妖力を込める。ただの人間にもわかるように、ぼんやりと手が光り始める。
「?」
手の甲を下にして、ゆっくりと手を開く。木の葉を模した私の弾幕が渦を巻いて空に広がる。
「悪戯をするだけが妖怪じゃない・・・超常の力」
木の葉の弾幕と吹き始めた風に煽られた本物の木の葉が混ざり、広がった弾幕が私の体の周りを覆い、その姿を見えにくくする。
「空を駆け、嵐を呼ぶ、天狗の力は妖怪の中でも上位に値します」
弾幕がクロスし、ゴンくんの視界が光に満ちた瞬間を見計らい、空を飛ぶ。
ゴンくんの周りを高速で飛び回る。その目にはもはや残像しか映っていないだろう。
「妖怪は噂や伝承から生まれる。ならば、人間は一生人間のままなのでしょうか」
飛び回りながら喋り、さらに風を操ることで、あらゆる場所から立体的に声が聞こえるようにする。
人間が妖怪になることは大罪・・・それは私が今まですごしてきた幻想郷においての規則。人間と妖怪のバランスを保つための。
だがここは幻想郷ではない。怪異なぞ存在しない、現世に近いこの世界。おもりを乗せる台すら存在しないならば、創ってしまっていいのです。
「実はそうではないのです」
逆位相の風を生み出し、即座に静寂を生み出す。
そして音もなくゴンくんの後ろに着地した私は、耳元でこう囁いた。
「ゴン。人間をやめる気はありませんか?」

Ｓｔａｇｅ５（後）・　化け物共（フリークス）の逢瀬

「人間を・・・やめる？」
　ゴンは耳元で囁いた文に対してその意味を問うた。
「そうです。人知を超えた強大な力を手にするには、人間のままにはいられないのです」
　まあ人間でありながら妖怪と大差ない、それどころか神の力すら超えているとしか思えない者もごく少数ながらいるのですが。
「なんでオレにそんなことしてくれるの？」
「それはあなたが欲し・・・いや、使える部下が欲しいからですよ」
「どれくらいの間？」
「しばらくの間、ですね。いつからいつまでとは確約できませんが」
　しばらくと言っても、それは人間じゃなくて私の、妖怪の基準ですが。
「どうです？あなたにとっても悪い話ではないはずですが」
　このくらいの年代の子どもだ、悪魔との契約であっても悪しきを考えず、いい面だけを気にするはず。
「じゃあいいや！」
　・・・え？
「むぅ・・・理由を聞かせてもらえますか？」
　正直予想外だ。何か重大な使命でも背負っているのだろうか。
「オレさ、ハンターを目指してるんだ。くじら島からここまで船できたのも、ここらへんでハンター試験が始まるからなんだ」
　ハンター、ですか。この地にたどり着いてから何度か耳にしましたが、何でも屋を高級にしたようなもののように感じましたが。
「たしかハンターには老若男女いたはず。試験の間隔はそれほどまでに空いているのですか？」
「ううん、試験は毎年やってる。でもオレ、早くハンターになりたいんだ！」
「それは、憧れというやつですか？それとも、君の年代の頃にはすでになっていた人がいたとか？」

「両方。オレの親父がハンターなんだ。それも、オレと同じぐらいの頃にはハンター試験に合格したんだって！」
「・・・それはすごいですね。」
　その親父さんはもうあなたに見切りをつけたようですが。
「親父はオレのことをほっぽりだして仕事してるんだ。でもさ、子どもをお母さんじゃない人に任せてまでやりたい仕事ってどれだけ面白いんだろうなって思ったんだ！」
　なるほど、重大な使命とかそんなものじゃなくて、父親に対する情景と当てつけですか。なんとも面白い。
「だからゴメン！その話はさ、オレがハンターになってその楽しさがわかってからにしてほしいんだ。それにオレ、妖怪の力ってすごいと思うけど、ハンター試験はオレの力で突破したいんだ」
　小さいなりの、男の子の矜持ってやつですか。
「・・・だめ？」
　上目遣いで頼みこんできた。　かわいい
「いえいえとんでもない、数年程度なら問題ないですとも。ただ、妖怪の適正というのは子供の頃こそ純粋でなりやすいもの。はやくハンターになれるといいですね」
　まあ、そのまま育ってくれるなら問題ないですが。
「なんかバカにされた気がするけど・・・ありがとう！」
「私も良い返事が聞けて何よりです」
　こんないい子を捨ててしまった親は何処の誰でしょう。ありがたくいただかせてもらいます。・・・ですが、少し気になってきました。
「ところで話は変わりますが、分かれる前の父親はどうでしたか？」
「ううん、オレ親父のことは親父のことを知っている人の話と写真でしか知らないんだ。なんせオレが物心付く前には家を出ていったって話らしいから」
「そうでしたか、私も君の知る親父さんの話を聞きたかった・・・」
　まて、今なんて言った？物心付く前には出ていった？それはいい。

じゃあ船を降りたあたりから親に見捨てられたのはなんでだ？
船の中で見限ったわけじゃないのは、そりゃそうだ。そんな短時間でハンターになりたいっていう夢を持つほうが不自然だ。
罠・・・いや、理性では最初から罠だとわかっていた。だからあとはおそらく父親が雇ったであろう、私を討ちに来た刺客を返り討ちにするだけ。
意識を集中して、周囲の風の流れを読む。枝が揺れ、木の葉がこすれる音がする。五感では全く不自然なものの気配はない。
だが、私にはわかる。風そのものを感覚器官として操れる私には、そこにものが存在すれば、風の流れが遮られることで、そのことがわかる。盗み聞きとはいい度胸ですね。
「・・・どうしたの？」
あまり残虐な立会の場を見せたなら、契約をためらうかもしれない。
「少し所用を思い出しました。それではまた次の機会に」
この子に見せるわけには行かないので、黙って行くことにしました。
「えー、せめて元の場所に戻してほしかったなー。・・・ここどこ？」

ちっ、気づかれたか。”絶”には自信があったんだがな。
ジンは森の影に隠れて会話を聞いていた。
ゴンを追った文に追いつかなかったジンは、文が再び山の方角へ向かったのを追った。
幸いゴンを抱えている影響か、帰りはなんとか追いつける速度になっていた。
その後、山の中に着陸したのを見たジンは、念の基本技術”絶”を用いて自身の存在感そのものを希薄にした状態で登山を開始した。
やがてゴンと文の声が聞こえるようになってからは、親しげに会話

していることからすぐに危害を加えないと判断し、なるべく情報を集めることに専念した。”舌”では見捨てる発言をしたものの、危ない雰囲気になったらすぐに登場する予定だった。
「盗み聞きとは感心しませんね。それで？いつから聞いていらしたんですか？」
「神とか妖怪とか、どうにも眉唾ものの話をしていた頃からだな。新しい宗教観に目覚めた気がするよ」
あえて嘘を吐くことも考えたが、その意味もなさそうなので、正直に話した。
どのみち第一印象はお世辞にもいいとは言えない。だが、関係を持てただけで一歩前に進んでいると考える。
「それはまあ薄情な。私が弾幕を出したときに子どもが危ないと思わなかったんですか？」
「大切にここまで運んできて、懇切丁寧に説明してたんだ。そんなすぐに殺したりしねえって判断した」
言葉こそ冷たいが、その間しっかりと目を見て話すことで、理性的な人間でありながら、『俺はお前を信用している』という感情面からもアピールする。
だがその時本当は、本能的にはやばいと思っていた。
奴が”弾幕”と呼んでいる行為の最中もその様子を潜んでみていたが、あれは念能力として感じ取ることはできなくとも、一つ一つが放出系能力者の念弾と同じエネルギーを感じ取れた。
自分であれば一発食らっただけでアウトではないが、あれだけの量を続け様に喰らえばマズイことはわかった。
そんな攻撃を、たかだか子供一人を勧誘するためだけの演出に消費できる実力がある、と気を引き締めることにした。
「そういうことでしたか。・・・ふむ、その顔、もしやゴンくんと何か関係でも？」
この質問はどうする？正直にゴンは俺の子だと言ったなら、こいつを騙したってことになる。それに騙した方法も聞いてくるだろう。必ずしも隠さなきゃいけない情報じゃないが。

年の離れた兄弟とか、あるいは叔父ってことにしたらどうだ？・・・叔父なら悪くねえとは思うが、こいつがどこまで察したか、勘違いした上で聞いてきたかわかったもんじゃねえ。
たとえ俺が本当に叔父だったとしても、やつの中で『父親だ』と思ったなら、それ以外は嘘だと思われちまう。
「あぁ・・・俺はあいつの、ゴンの父親だよ。それがどうした？」
正直に話すが、それでも何をしたのか、どうしてそれをしたのか、その詳細については白を切っておく。
「一応私、狙う人間は決めているんです。あなたが姿を現すまであの子は両親に見捨てられた子どもだと感じ取っていました。どうやって私を騙したんですか？」
「騙しただぁ？俺はそんな感覚ねえからわかんねえよ」
もちろん心当たりはあるが、ここは嘘をついてもいい場面だろう。あまり手札を見せ続けるのもよくない。
「うーん・・・私のほうが間違えた・・・？いや、あれは私をおびき寄せるためにやったとしか・・・」
ブツブツと独り言を言いながら考え始めた。
「（何かしたってことはわかりますが、これ以上聞いても白を切り続けるだけでしょう）であれば何も知らないということにしておきます」
「そろそろこっちもいいか？聞かれっぱなしなのもフェアじゃない」
「いいでしょう。何を聞きたいですか？」
こいつの行動指針とか目的はすでにわかっている。なら・・・
「お嬢ちゃんのやってきたところ・・・暗黒大陸って言うんだが」
「ちょっと待ってください」
「なんだよ」
「お嬢ちゃん呼びはやめていただけませんか？訂正を要求します」
「どっからどう見てもガキンチョだろーが」
文は大人びた言葉遣いこそしているものの、高い足をした下駄を除けばその身長は小学生程度。傍から見ればジンと文はもはや親子のようにしか見えない。
「失礼な。あなたが巧妙に人間のふりをした人外でもない限り、私の

ほうが年は上です」
「じゃー何歳だってんだよ？」
「女性に年齢を聞くとは男がなってませんね。千本桜を数えてから出直してらっしゃい」
千本桜・・・少なくとも千年前から生きてるってことか。
「・・・とんだショタコンロリババアじゃねえか！」
「あー、よくわからないけどなんかバカにされた気がする」
「驚いた時の常套句みたいなもんだよ。他意はない」
嘘だ。
何に怒るかを知ることによってその人を知ることができるってのが俺の持論・・・ってことでちょいとカマかけて見たが、よくもまあ変な情報が手に入っちまった。
まったく、ゴンもとんだやつに好かれたもんだねぇ。
「まあ呼び方はゴンと同じで文でいいんだろ。話を戻すが、俺たちは偶然海の上を飛んでいるお前を見ていたんだ」
（俺たち・・・組織で動いているということですか。考えてみれば当然ですね）
「おそらく文が飛んで来た場所・・・調査隊の一員が偶然空を飛んでいる文の姿を見たんだ。俺たちはそこを「暗黒大陸」と呼んでいる。その中に幻想郷ってのがあるのか？」
だとすれば、暗黒大陸の中に人が住める環境があるってことだ。調査が飛躍的に進む。
「ふむふむ、あの島の名前は暗黒大陸と呼ばれているのですか」
文は手帳を取り出すと、その表紙にペンで「暗黒大陸」と記した。
・・・！表紙に記したってことは、もしやあの中身は暗黒大陸に関するものか!?
いや、無理に見ようとして手番を減らすのは愚策だ。滞在日記ぐらいなら調査隊にも出せる。
「幻想郷については、全く違います。といっても私自身よくわかってないのですが」
文は木の棒を持ち出すと、地面にガリガリと簡単な図を描き始め

た。
「私の住んでいた世界がこの円だとすると、この中に小さく幻想郷が存在します。幻想郷は世界から切り離されているわけではなく、認識の結界によって、本来は地続きになっているのですが、その存在を知らない者には入ることはできません」
「じゃあ戻れるってことか？」
「話は最後まで聞いてください。私は幻想郷で何不自由なく暮らしていたのですが、前触れもなく幻想郷の外に追い出されてしまったのです。当初私は外の世界、つまり幻想郷の外を囲んでいた世界に来てしまったと思っていたのですが、どうにも様子がおかしい。あの暗黒大陸と呼ばれている化け物の住まう大陸なんて聞いたことありません。恐竜のような巨大な生物が跋扈する世界ではないのですよ」
　山のようにでっかい生物はそこらへんにうようよいるんだがな。そんな平和な世界、想像もできん。
「ということで私はこの外の世界ではなく、別の世界に来てしまったと結論付けたわけです。幻想郷には数こそ少ないものの、世界を渡る能力を持つ者はいますから」
「そういった能力を持った奴がたわむれに文を外に出したとでも？」
「可能性がある程度です。当然私には世界を渡る力なんてありません。私は輪廻転生なんて信じてませんから、死んだら元どおりになるなんて考えませんよ。むざむざと死ぬのも嫌なので、この世界で生き延びるべく行動したわけですよ」
　畏れを得るってのは本当に生きるために必要なことだったってことか。
「わかった。じゃあ次の質問だ」
　一つ質問するだけで随分と脱線しちまったが、まあいい情報だった。
「文が弾幕って呼んでたやつ。あれってなんだ？」
「幻想郷における代表的な決闘方法ですね。人間と妖怪のように、力の差がありすぎる者たちの間で勝敗を決したい時に、弾幕ごっこをします。役割を分けて、片方がぎりぎり回避可能な射撃を打ち、決めら

れた回数耐えきれるかどうかで勝ち負けが決まります。ちなみに当たると結構痛いですよ」
　そういうと文は空に弾幕で幾何学模様を生み出した。
「ぎりぎり回避可能な射撃を打つ？それに無駄な弾が多すぎる。勝ちたいならいくらでもズルできるじゃねえか」
「無駄こそ美しさ。無駄こそ個性。無駄な弾幕によって品性を示すのですよ」
「踊りで会話する民族がいるように、それも一種の文化ってやつか。なかなか興味深いねえ」
　ふむ。攻撃方法についての敵情視察として質問したが、この機会にもうちょっと調べてみるか。
「人間も弾幕ごっこをするっていったな。俺にもその弾幕は出せるのか？」
「力があれば。妖怪には妖力が、神に準ずる者には霊力が、魔の道をいく者には魔力があります。そういった力を弾幕にするのです」
「あいよ」
　しめた。予定通りの流れだ。
　軽く力を込める、ふりをする。並の念能力者では何も見えないだろう。だがすでに球状のオーラが俺に手に宿っている。「隠」によって巧妙に隠されているが。
　横目で文の様子を見ると、棒読みで「がんばれー」と言っている。この状態ではまだ見えてないようだ。
　この状態でさらに力を込めるジェスチャーをしながら、少しずつ「隠」の精度を落としていく。その都度文の様子を見るのを忘れない。
　これは、俺が弾幕を出す練習・・・に見せかけた、文の「凝」の精度を確かめるものである。どの程度の「隠」を使えば念能力の発動を隠しながら効力を発揮できるか、その境目を探っているのだ。
　しばらく続けると、文の目にも光の球が見えたようだ。その精度は、およそ二流の念能力者の普段使いの「凝」ぐらいか。まあまあだな。
　本来の俺だったらストレッチがわりに球状にしたオーラを身体中

に移動させるぐらいのテクニックは持っているが、今はそれを見せる必要はない。多少ぎこちない程度に見せながら、5個の球を宙に浮かせた。
「上手上手」
　ぱちぱちと手を叩いてくれたので、「へへっ」と笑いながら、たわむれにゆっくりとしたスピードで弾を文に向けて射出した。当たっても避けない方が悪いと言えるように。
「おっとあぶない」
　とからかうように話しながら、懐からカメラを取り出し、俺の念能力の弾幕を撮影した。
　カメラに写った念のオーラはその瞬間、何もなかったかのようにかき消されてしまった。
「!?　おい、消えちまったぞ!」
　除念・・・だと!?
　あのカメラの能力・・・それとも文がカメラで撮影した念能力は消え去る・・・？
「このカメラは弾幕を撮影するために河童に頼んで作ってもらいました。妖力を込めてシャッターをきることで、それに写った射撃は消えるんです」
　そう言うと、文はたった今撮影した写真を現像してジンに見せてきた。
「よく取れているでしょう?」
「あ、あぁ、なかなかだな」
　手帳といい、カメラといい・・・まるで暗黒大陸で言う”リターン”みたいじゃねえか。だとしたらリスクは・・・それこそ子どもをさらう天狗がのさばる街っていう風評被害か。
　だが奴は空を高速で飛べる。逃げに徹されると不味いな。やるなら手帳とカメラを壊さない方法で、なおかつ確実に殺せる場面でないといけないな。そのためには・・・
「じゃあ最後の質問・・・いや、頼み事と言ったほうが良いか」
「できることなら」

「手合わせを願いたい」

「力比べですか。いいでしょう。ルールはなんですか？弾幕ごっこ？頭脳戦？」

この世界に来てからまともな戦いがなくて、身体がなまっていたんですよ。そろそろ発散したい。

「喧嘩っ早いな。言っておくが戦うのは俺じゃない」

なんだ、貴方じゃないんですか。

「じゃあ誰を呼んでくるんですか？弱っちいのと戦うのは時間の無駄ですよ」

「安心しな。見た目は爺さんだが、俺たちハンター協会の中でも相当な上位の人間だ」

爺さん・・・協会・・・私の力を測るための捨て石とでも言うのでしょうか。

協会というのは災害対策本部のような立場でもあるとすれば、この事実を持ってして私に対処していると公表したいのでしょうか。

私が僅差で勝ったとすれば、より上位の人間か、私の対策を施した人間を用意する。

同じく僅差で負けたとすれば、対処可能として大々的に発表されることでしょう。

私が圧勝すれば平伏するが、あるいは現世にもある大量破壊兵器を繰り出してくるかもしれません。

逆に私が圧倒されれば、大したことない問題として頃合いを見て処分される。

私が圧勝するのはまずありえない。曲がりなりにも子どもをさらう私の姿を見ながら手合わせを願ってきたのですから、少なくとも勝機はあるのでしょう。

ただの喧嘩をするのはいいですが、こうも不利益ばかり目立ってくるなら・・・

「前言を撤回します。さようなら」
「まあ待て。理由を聞こうじゃないか」
　私が承諾すれば、そのまま通すつもりだったのでしょうか。
「私にとって百害あって一利なし。妖怪相手だったとしても、互いに利益のある契約にするべきでしょう」
「(気づかれたか) 勝ち負けの結果は公表しない。これでどうだ?」
「誰に、ですか?」
「誰にも、だ。もちろん観戦者は認めない」
「であれば、人払いはそちらでしてください。無関係の人間は許しませんよ」
　そういったしがらみが無いのなら観戦者はむしろどんと来いなんですが。
「私は幻想郷に置いては新聞家業も嗜んでいました。破ることがあれば、あなた方ハンター協会を調べ上げて、あることないこと記事にしてやります。それで?私にとっての利はなんですか?」
「ゴン」
「・・・・・・別に、素質のある子なら誰だって良いんですよ?」
「ほーう、素質があるのか、良いことを聞いた。親バカじゃねえが、世界中回ってもあいつみてぇな原石はそうそういないぜ」
「親であっても、子どもを見捨てたあなたには関係ないでしょう」
「あれか。なんでそうなったわかんねえってのはすまん、ありゃ嘘だ。たぶん同じ方法で撤回できる」
　ちっ・・・嘘を言っている顔ではないな。
「ふん、あとは私の自由を不当に侵害しないと約束するなら、こちらも雲隠れはしないと約束しましょう」
　ハンター協会にとって一番やっかいなのは、おそらくこちらを捕捉しないうちに完全に関係を絶たれることでしょう。
「こちらも了解した。場所と時間はここに書いてある」
　ジンは紙にメモを記すと、文に渡して下山していった。

Ｓｔａｇｅ６（前）・　観音さま猿田彦さま

「ようやく到着ですか。淑女を待たせるものではありませんよ」
「爺に山登りをさせるもんじゃないよ、お嬢さん」
　ここはどこかの山奥深く。文に関して言えば時計なぞ持っているはずもなく、ただ太陽の位置からおおよその時間を推測する以外になかった。
「ふん、それにしては汗ひとつかいていないじゃないですか。直前までお迎えされたんじゃないですか？」
「安心せえ、人っ子一人この近くには寄り付かせん。それにいい運動になったよ」
　標高約３ｋｍにもおよぶ山の頂点に二人はいた。この山の麓では入山規制がかけられており、ハンター達による厳重な警備がなされていた。
　ちなみに彼は麓で車から降りて１時間とかからず、切り立った崖をその足だけで登ってきた。
「こんなシャツ姿じゃこの山の上は、何もしないでいると少々寒すぎる。ウォーミングアップというやつじゃ」
「ところで先程から気になっていましたが、そちらの着物はどちらで？私の目には「心」と書いているように見えますが」
「お目が高いのうお嬢さん。これはジャポンという島国のお土産じゃ。なかなかイカしているじゃろう（こやつジャポン語を読めるか。母国語かあるいは習っていたか）」
「外の世界では漢字の意味がわからずともカッコいいという理由で着物をお土産に買っていくという話がありましたが・・・まあ悪くないですね」
　モデルとしか思えないような顔付きの外国人がなんとも間抜けた日本語のシャツを着る姿は日本人としても失笑を隠せない。
「そうそう、申し遅れたが、ワシの名前はネテロじゃ。訳あって立場は明かせないが、以後よろしくたのむ」
「ご丁寧にどうも、ご存知かもしれませんが、私は文、射命丸文です。

以後よしなに（都市部で聞いた話によれば、ネテロといえばアイザック＝ネテロ、ハンター協会の会長じゃないですか。ジンめ、私が何も知らないとお思いですか）」

ジンがネテロに立場を明かさせなかったのは、その役職によってハンター協会の強さを知られたくなかったが故にだったが、結局のところ調べればわかること、申し訳程度の時間稼ぎにすぎない。

「私のことはジンからある程度のことは聞いていると思います。私の力についても。そこで、私がもともといた世界、幻想郷において、人間と妖怪のように力の差があるもの同士が勝敗を決める際の平和的決闘方法として、「弾幕ごっこ」があります。お爺さんには弾幕を打てないでしょうから、私からの弾幕を避けるだけになりますが・・・」

「一方的にお前の攻撃を避けるだけ、か？」

「そうです。細かい規則は今から説明しますが」

ヒュッと風切り音が聞こえた、否、聞こえるより前に、文の目の前に巨大な掌が現れた。

むしろ文は風切り音を聞いて、ようやくネテロの方から掌が突き出されたのだと認識できた。

「御託はいい。試合にそんなもったいぶった規則なんていらねえよ。さっさと来やがれ」

ネテロの背後には仏、千手観音のような多くの腕を持った黄金の像、『百式観音』があった。

その攻撃の速度は常人にはもはや認識することすらかなわない。

「いいでしょう。私に本気の勝負をしてほしいのなら、それにふさわしい力を示すことですね。さあ、手加減してあげるから、本気で掛かってきなさい！」

文との試合の約束を取り付けたジンは、ハンター協会会長室に到着した。

「ジンじゃな。首尾はどうだった？」

ジンが文を追っている間、ネテロは何もしていなかったわけではない。
いつもの着物姿からは打って変わって、胸に「心」と書かれたTシャツを着て、ウォーミングアップにより程よく汗をかいた姿はまさに本調子といったところだ。
「手合わせしてもらうことを約束した。それなりに強いジジイを出すってな」
「それなり、か。ワシより強い奴がいたら会いたいもんじゃのー」
ネテロは武の神とまで呼ばれるほどの武芸者である。正面切って戦えば、暗殺しようとしても、勝てる相手はいない。
「一番つええって言った奴が負けちまったら後がねえからな」
「ふむ。・・・底は見えんかったか？」
「そう簡単には見えねえよ。だが、攻撃手段の一部と、やりようによってはヤバそうな持ち物を見せてもらった」
「ほう、なかなかやるもんじゃな」
ネテロ個人としては教えて欲しくなかった。ジンはこちらの情報を明かしてないであろう状態で、一方的に、他人から教えてもらうのは公平じゃない・・・なんて甘っちょろい理由ではない。
未知との戦いを楽しみたかっただけという、もっと子供染みた理由だ。
だが、ジンをして負けるかもしれないという判断、なによりもハンター協会会長としての立場が、聞かないという
行動をとらせなかっただけだ。

岐符「天の八衢」
『俺が見たのは、まずは弾幕ってやつだ。文の力は念能力じゃないから正確なところはわからなかったが、だいたいこれぐらいのエネルギーの弾を数百個単位でばらまいてきた』
（なるほどの。たしかにこいつは弾幕と言える）

ネテロは背後の百式観音を消して避けに徹する。その弾幕一つ一つに込められた力はもちろんネテロにも見えなかったが、ジンの話が本当ならネテロどころか、ピンポイントメタな能力者以外には受ききれないだろう。

『しかもそいつはガキンチョ一人勧誘するために演出としてやった行為だ、全然本気じゃねえだろうな』

目の前に迫る弾に対してネテロは大きく左に避ける。これほど大量の弾幕を展開している上、弾そのものがぼんやりと光っている。必然的に互いの姿は見えなくなるため、その隙に乗じて背後から攻撃するのが最善だとネテロは判断した。

しかしそれは、弾幕ごっこにおいては最悪の手であった。

「！」

目の前にのみ展開されていると思っていた弾幕は、３６０度全てに発射されていた。素早く動いたが故に慣性を殺しきれず、左手にある弾幕に対して自ら突っ込んでしまう。

「流」によって左手にオーラを集めてガードすることに成功したが、その手には若干痺れがのこってしまう。

(なんつーエネルギー・・・相当オーラを持っていかれたわい。あと２発も喰らえばまともにガードできなくなりそうじゃ。ノーガードで当たっちまえば腕ごと持っていかれそうだしな)

「おやおや、当たってしまわれましたか。もうちょっと難易度を下げた方がよろしかったですかねぇ？」

「手加減やめさせてーんだ、そんなことさせっかよ。それに何すれば良いかもわかった」

再び文を中心に放射状に弾幕が展開される。

その密度は濃く、人一人がようやく潜り抜けられる程度。そして、ここに行けば弾幕が当たらないなんて安全地帯は存在しない。

ならば答えは一つ。

ネテロは目の前に迫る弾幕に対し、最小限の動きで、弾と弾の間に身体を入れるように動く。

常人であれば避けるだけでも苦労する雨の中を、何事もなく歩く。

前に進んでいる以上、文との距離は縮まる。近づけば近づくほど射出される弾は速く、事故りやすいところをたやすくやってのけた。百式観音を使わない、格闘家としての間合いにまで詰めたネテロは、ひとっ飛びに文の方へ向かって蹴りを入れた。蹴る前に放たれた弾幕に当たらないように、残心も忘れない。

吹っ飛んだ文は空中で静止すると、周囲にある弾幕をかき消した。

「まだやるかい？」

「スペルカードはまだまだ残ってます。最後まで楽しんでくださいね」

文は懐から紙を取り出す。といってもこの紙自体に力はなく、ただ試合前にホイッスルを鳴らすような規則、儀礼的なものである。念能力で言う、制約に近い。

風神「風神木の葉隠れ」

「させるかよ」

アニメの変身シーンを潰すかのように、ネテロは再び飛びかかる。

「そういう速攻は対策済みなんです」

スペルカードを宣言するより前にネテロの攻撃は届いたが、先ほどと違って手応えはない。

そして、文の周りに吹雪のように弾幕が展開される。急速に曲がり、紋様を描くように。

このままでは取り囲まれると気付いたネテロは、ガリガリと弾幕にかするたびにオーラを削りながらすぐさま後ろに下がる。

(なんと厄介な・・・あのカードを掲げた瞬間から少しの間は攻撃が効きにくい、あるいは無力化しているのか。どうあっても弾幕を攻略せんことには始まらんようじゃな)

紅霧異変以降、勝負を速攻で終わらせず、弾幕を攻略することに重きをおくべく、少なくともパターンを一周するまでは攻撃がききづらくするという規則が設けられていた。

「この弾幕は私の周囲に展開されるもの。先ほどのように、そう簡単に打撃で攻略できるとは思わない事ですね」

弾幕が2週目に入った。

ならば、とネテロは文の、弾幕ごっこの思惑通りに攻略を始める。
まず周囲に紋様を描くように、目の前のネテロにとっては壁があるような感覚で展開される。
文はそう言ったものの、常に周囲に弾幕があるわけではなく、一定数放出された後は四方八方に飛び散っていく。狙うならそこしか無いが、飛び散った弾幕を避けた後の隙は一瞬。そこに身体を潜り込ませるのはどうしても無理だ。
だが、ネテロにとって、攻撃するだけなら一瞬あれば充分に過ぎる。
弾幕が3週目に入った時、ネテロは「円」によって弾幕の全体像を把握。弾幕が交差する事で生まれた網目状の隙間の中で最も大きい場所に移動し、限界まで前に出る事で、背後に充分なスペースを作る。
あとは心静かに、文との間に弾がなくなる瞬間を待つ。

（・・・今！）
ネテロの祈りは一瞬にして行われ、ネテロの念能力「百式観音」が背後に現れる。そしてネテロは空を切るように平手を振り下ろす。
百式観音　壱乃掌
ネテロの手の動きに追従するように背後の観音像もその掌の1つを振り下ろす。
手応えがなかった先ほどとは違い、文は地面に叩きつけられる。
頑丈な妖怪の身体とはいえ、流石に百式観音による攻撃はこたえたらしい。
整えられた髪の毛は乱れ、服には風圧で切れ目が入り、頭からは一すじの血を流しながら起き上がる。
「あなた、なかなか弾幕ごっこの才能ありますよ。だけどもうちょっと手加減してくれても」
「お嬢ちゃん、攻守交代といこうじゃないか」
「せめて賞賛の言葉だけでも聞く耳持っていただけませんかねぇ」
「お遊びの才能があるって言われたって嬉しかねえよ。んまあ褒めてくれるってんならもうちょっと派手に行こうじゃねえの、弾幕ごっこらしく、な」

顕現している観音像に再び攻撃の意思を伝えるべく、ネテロは構えた。

百式観音　九十九乃掌

観音像の持つすべての腕が、息もつかせぬ乱れ撃ちを始める。

多腕を操る関係上、その速度は先の壱乃掌より僅かに劣れども、総合的な威力、密度は遥かに増している。

弾幕ごっこと言うにはいささか暴力的であり、乱打なれど一切の無駄も避けさせる意思もない拳幕は、たとえ歴戦の少女であっても規則の範囲外ーーースキマとか夢想天生とかーーーの力を使わず、一切のミスなく凌ぐことは到底かなわないだろう。

しかし、通常の弾幕ごっこの規則の範囲外の力なら？

「攻守交代というのならせっかくなので」

そんな声が聞こえた気がする。

気付けば、百式観音の掌の一つが無くなっていた。

Ｓｔａｇｅ６（後）・　観音さま猿田彦さま

百式観音の掌の一つが消えた。
壊れたわけではなく、消えたのだ。
されたことは単純。
文が胸元にあったカメラを取り出し。
そのレンズに百式観音を映し。
シャッターを切っただけ。
ただそれだけで、いともたやすく、百式観音の掌の一つは弾幕の一種として撮られてしまった。
厳密には、百式観音そのものは弾幕ではない。
しかし、幻想郷には雲居一輪という入道使いが、雲山という入道雲の妖怪が放つ拳を弾幕として採用している。
当初は文も「そんなのありですか」と戸惑ったものの、弾幕だと認識できたなら、あとはカメラで撮るのみである。
このカメラのことをジンは危惧していた。
放出系の念能力を消滅させる、だけではなく、念で形作られたものは何であれ除念させられてしまうのではないかと。
それこそ具現化系に近しい、百式観音ですらその範疇ではないかと、そう思った。
ただの具現化系能力者なら普通、自身の念能力が破壊、消滅させられることは織り込み済みで発を作る。
絶対に壊れない物なぞ作れやしないし、絶対に負けない人間はいないからだ。
だが、ネテロは違う。
「一日一万回　感謝の正拳突き」によって独学で個の極地に至ったネテロは、その生き様を、感謝の対象を、狂えるほどの妄信によって生み出した武の神を顕現しているのだ。
故に不敗。個の極地に至った後のネテロは負けることを知らない。
故に不変。武の神の姿を侵されたことは一度としてない。
それ故に、もしも、あのカメラによってその姿が歪められたなら、ど

のような影響があるかジンには想像できなかった。
だからジンは言った。『もしも文がカメラを構えたのなら、なりふり構わず百式観音をしまえ』と。

ネテロは掌の一つがなくなった現状を確認し、一度消滅させた後、しっかりと姿かたちをイメージしながら今一度祈りを捧げ、百式観音を顕現する。
そこには寸分違わず――――掌を失ったまま――――変わらない姿があるだけだった。
「（あややややや、雲山さんのときはちゃんと腕は再生していたんですが・・・少し悪いことをしましたね）まだ、続けますか？どうやら治らないようですが」
「『生温いこと言ってんじゃねえよ』」
『ジン、お前はこう言いてえんだろ？百式観音がパワーダウンしちまう真似はよせってな。だがな、殴られるのが怖くて殴り合いができるか？んなもん、転ぶのが怖くて歩き出せなくなるようなもんだ。
ワシはそうはなりたくない。そうはなれない。そんなカシコい真似はできねえんだよ』
厳密に言えば、ネテロがカメラに対して何もしなかったのは、慢心以外の何物でもない。ただし、慢心せざるを得なかったのだ。
ネテロは百式観音に、己の信ずる武の神に絶対の信頼を寄せている。もっとも、常に相手の全力を受け止めるという健全な武闘家精神は、真剣な立会の前には消え去る。
ただ、百式観音になにかしようとする者がいれば、その百式観音の力でその脅威をされる前に排除するだけだ。
その中に、百式観音を引っ込めて脅威をやり過ごすという選択肢はない。
それは、武の神に対する裏切り行為だ。負けるはずのない対象が、負けるかもしれないという可能性だけで負けを認める、そんなことをしたくなかったのだ。
そのネテロの一途な想いに答えるがごとく、掌のひとつを失った百

式観音は勢いを増した。
物量としては1％減った。だがネテロの闘志は減るどころか、最強たる自信を持つ自分の攻撃にカウンターを入れる強者と戦える喜びに震えている。ならばその腕一本一本に伝わる力の質量が増したのは当然の道理。
二対の掌底が文を襲い、吹き飛ばす。それに追撃をするべくクロスチョップの要領で横薙ぎに腕を振るう。
しかし、カメラに妖力を込め終えた文は、掌が交差して自身に触れるその一瞬をシャッターチャンスとした。それによって交差して迫ってきた掌は写真へと変換されてしまった。
「まだやりますか？」
「まだまだ、こんなもんじゃねえだろっ・・・！」
あの撮影をする前・・・カメラにオーラみたいなのを込めている。それによって体力を消耗しているわけじゃねえし、一種の制約みたいなもんか。
それが終わるまでの間は、ひたすら避けに徹している。さっきまでバカスカ撃っていた弾幕が一つもきやしねえ。
だとすれば・・・オーラを込め終えた瞬間に顕現を止め続ける？
ネテロの攻撃をかいくぐりながらなんとかチャージを終えた文。決定的なシャッターチャンスをモノにするべくカメラを構えるが、その時にはすでに百式観音は姿をくらましていた。
「お隠れになってしまわれましたかぁ。せめて5枚は撮りたかったところですが、小躍りでもしていれば天の岩戸から出ていただけるでしょうかねえ？」

バカが！そんな考えじゃいつまでたっても勝てねえだろうが！
だれにも知覚されない速さの祈り。その祈りに応えるべく現れた百式観音の、比類なき速さの手刀突きに文は貫かれる。
しかし速さに自信のあるのは文とて同じ。極限にまで凝縮された時間の中でわずかに身をよじり、されど左腿を貫かれた。
かすり（グレイズ）による傷程度なら妖怪の地力で再生できる。そ

れよりも特ダネを得るべく、戻される前の腕にシャッターを切るものの、撮れたのはその残像。実像はすでに消え失せていた。
カメラに込めた妖力を無駄に消費してしまったのをいいことに、激しい乱打が始まってしまう。

なるほど。こちらの準備が整った時点であの観音像を消し続けるのではなく、危険を承知で一瞬だけ顕現させる。実に攻めっ気のあって
、私としても小躍りせずに済みました。
しかもあのお爺さんは気付いている。私が観音像の動きを見てから避けているのではなく、その前、祈りの所作を見て予測していることを
。

おそらく今までは自分自身でも気付いていなかったのでしょう、祈りと顕現、そして攻撃への一連の流れは完全に同期してはおらず、僅かに隙間があることに。
無駄なようで無駄に等しく、されど神速で行われるそれは、何処の誰にも避けられるものではなかった。指摘するものすらいなかった。
だからこそ悠長に全体の動作を見せていて、次第に避けられてきていたことに一抹の不安を覚えた。
今は観音像の乱打で巧妙に自分の姿を隠しているし、時折砂埃をあげて見えにくくしている。正直避けにくいったらありゃしません。
っと、妖力充填完了。不意打ち・・・する前に観音像も消えてしまいました。
ならば後は居合抜きの時間です。

まったく、ワシもまだまだ未熟者じゃな。避けられてこなかったことにかまけて、自分でもこの遅れに気付けなかったとは。この気付きこそ強者と戦える喜びじゃ、感謝するぜ。
今は、今だけは勝つために姿をくらます。だが今度戦う事があれば、それは生まれ変わったワシじゃ。その隙、突けると思うなよ？

奴のカメラも準備万端。奴にとっては屏風から這い出た虎を瞬時に捕まえる心境。守る側、文が読み違えればもう一度チャージする時間が生まれ、即座に不利になる。攻める側、ワシが捉えられれば、百式観音はその一部が切り取られる。奴に回復手段があればその限りではないが、撮られた部分は永久に失われると考えたほうがいいだろう。

まっすぐいってストレート、それだけで勝ててきた。搦め手とは弱者が強者を倒すための手段だ。だがワシは・・・いつまでも強者だとおごり高ぶる気はねえ

銃を手にしてフェイントの練習をするよりも、動いている相手に外れる可能性がある限りは急所狙いの練習をするほうが有意義だ。クレー射撃のように飛んでいる的を射抜くのもいい。スナイパーのように、より遠くの敵を狙うのもいい。一発でも当てるだけで十分に相手を傷つけるという目的を達成できるのだから。

だが、それだけでは目的が達成できないとしたら?あるいはそれができない状態だったら?

最強の武器を持ったが故に、最強であればそれでいいとあぐらをかいたネテロの怠慢。

それでもネテロは個の極地。万全とは言えずとも、武器を使いこなすすべなぞアドリブでやってのける。

感謝の祈りをささげ、百式観音を顕現。両の手を合わせて大きく上に掲げた後、大きく振り下ろす。

百式観音による攻撃はいずれも高速とはいえ、小ぶりな攻撃にはどうしても劣る。そんな攻撃を、読まれれば終わりの場面に持ってくるとは文にも思えなかった。案の定、そのアームハンマーはカメラの射程外――過去2回にわたって撮られて消えた腕の範囲から予測した位置――に向けて落とされる。

もちろんそれは囮で、振りかぶったことにより視線が上に向けられることを期待したもの。

それに遅れて、下からすくい上げるように手刀を繰り出す、多腕による多方面同時攻撃。

「読めてますっ・・・!?」
本命だと思われていたその手刀は途中で止められた。だがそれすらもフェイク。
ネテロは親指と人差し指で丸を作り、中指を立てる。
すると、文の背後に現れた観音像が、掌で文を優しく包み込む。そしてネテロのオーラのすべてをぶつけんとするべく、その口を開いた。

百式観音　零乃掌

無慈悲な咆哮が轟く。ネテロが生涯かけて練ったオーラはまさに必滅の一撃。たとえ妖怪とはいえ、叩けば血が出る以上、これをまともに受ければ致命傷足りうるだろう。
零乃掌の掌に包まれて、攻撃が開始されたならば、そこから逃れうる術はない。まさに奥の手、切り札。この時ばかりは、ネテロもさすがに勝利を確信した。

ふっと一瞬だけ光線の放出が途切れ、物影が横切るのが見えた。あのカメラの能力ならば零乃掌の拘束を解き、鴉天狗の速さを持ってすればその数瞬で抜け出すことは不可能ではない。
そして文は抜け出すだけでは終わらない。ネテロは零乃掌を止め、即座に蹴りで反撃に移る文をはじき返した。
「なかなかやるじゃねえか。背中に眼でもあんのか？（すこしはまともに入ったみたいだが・・・すぐに抜け出されちまったせいで思ったよりダメージは小さく済まされた。途中で止めたから全部のオーラを放出したわけじゃねえが・・・かなり厳しい）」
「最近摩多羅神という背後から攻撃してくる神がいましてね。全体把握能力は鍛えているんですよ（生命力を凝縮して放ったかのような熾烈な攻撃・・・威力としてはマスタースパークと同等だが、背後から出る不意打ち性能や拘束力、なにより展開速度が弾幕ごっこのそれとは殺意が違う。1秒も被弾していないのにこの損傷ですか）」

文は背中を中心に熱線を浴びて、その肌があらわになっていた。このままでは乙女の恥として服を最優先に再生させたが、細かな傷まで回復させる余力は今はない。
ネテロ本体には傷らしい傷は全くない。ただし、弾幕の防御や百式観音の展開、なにより零乃掌は最後まで出し切ったわけではないにせよ、その発動に多大なオーラを消費し、息切れを起こしていた。
「結構真剣にやっちまってたけどよ、別にどっちかが死ぬまでやる必要はねえんだ。次の勝負で勝ったほうが勝ちってことにしねえか？」
「あんなもの（零乃掌）まで持ち出して一体どの口が言うんですかねぇ。でも、まあ、それには賛成です。このままだと行けるところまで行っちゃいそうですし・・・締め切りギリギリまで攻める事もありません」
文は懐から紙を一枚取り出す。
「このスペルカードは・・・耐久型。本来ならば制限時間いっぱいまで被弾しなければいいことにしています。もちろん、貴方の言いたいことは分かってますよ」
「・・・ありがとよ。ワシの流儀に付き合ってくれて」
「後から頼まれても制限時間なんて作りませんからね」

「無双風神」
「無双風神」は「幻想風靡」の上位スペルであり、最も厳しい難易度設定をしている。
文の姿が消え、ネテロの周囲３６０度全てに大量の小粒弾幕が展開される。
どこか遠くに逃げ出した訳ではない。常人には見えないが、たしかに存在していた。弾幕を放ちながら、超高速、文の全速力でネテロの周りを円を描くように動いていた。
（弾幕が途切れないっ・・・！元より限界じゃったが、これでは飛んでいる奴を百式観音で迎撃するのは無理か）
さらに時折トップスピードを維持しながら移動方向を反対にした

り、ネテロの頭上を通りながら、少しずつ近付いてきていた。当然弾幕の供給量は変わらないので、文が近付くにつれて見てから全てを避けるのは困難になっていった。
人間の視野角は１８０度程度。どうあがいても後ろからの弾幕はさばけない。ましてや死角となる頭上からの弾幕も。
だが念能力者はそんな人間の体の仕組みすら超越する。
ネテロは即座に”円”を展開すると、その全ての弾を避けに徹した。
（お優しいこって・・・わざわざ近づいてくれるなんてな。だが・・・このペースだと間合に入るまで３０秒。全容を把握できる大きさの円を展開し続けていると、一撃入れるためのオーラすらもう無くなっちまう）
ネテロの通常の円の範囲は・・・ちょうど百式観音の攻撃範囲と一致する。その範囲の円を維持するには当然それなりのオーラが必要になる。だがすでに消耗しているネテロには余計でしかなかった。
故にその円の範囲を縮小。１０ｍから５ｍ、３ｍ、１ｍ・・・ついには肌からわずか数ｃｍの範囲にまで絞り、オーラの消耗を抑える。同時に纏を解除して絶となり、最小限の防御手段すら捨て去る。
全ては次の一撃のため。勝つために他の手段がないのなら、命すら掛け金にする。
一度でも被弾（ミス）すれば即死につながる。緊張して然るべき場面でありながら、不思議とネテロの心境には一片の震えも歪みもなかった。
凪。ネテロの心を揺るがすものは何一つとしてなかった。ただ一つ、勝利のため。ただ勝ちたいと願うその心には他の何者も干渉することはできなかった。
（ふふ・・・これが人間の輝き。信念のために自らの命すら掛け金にする。長生きするが故に、いずれ生きることを生きる目的とする我らとは決定的に違う。やはり人間は素晴らしい。それでも・・・そう簡単に勝てると思わないことですね！）
円周が短くなればその分曲がる力を強くしなければならず、速度は下がるはずだが、そんな物理法則すら無視してなおも加速する。その

力を誇示するかのように。
されどネテロには当たらない。極限まで最適化された最小限の動きで、柳のごとく、見るまでもなく感じながら避けている。
ついにはネテロの間合いの一歩手前に入る。その時を今か今かと待ちわびていた。
だがそこで文は空高く舞い上がる。弾幕もかき消して、この場に静寂が訪れる。

ガァンッ!!

天より重力の支援を受けた助走をもって放たれた蹴りは、下駄の硬さと文自身の質量によって、さながら急降下爆撃機のような一撃を生み出した。
だがネテロは地に足をつけて、完全にタイミングを合わせた正拳突きを放った。それは対象が頭上にいても威力は変わらない。

その勝負の行方は。

Ｅｎｄｉｎｇ．　勝った負けたは無粋の極み

ネテロの正拳突きを下駄で受け、反動で大きく空を飛ぶ文。
そのまま着地しようとするも、足に力が入らず、尻もちをついてしまった。
「あやや・・・もう力が入りません。私の負けですね」
「ふぅー、強者との闘いは心が踊るが・・・もうおヌシとはやりたくはないのぅ」
規格外の物量、本人の機動力、トドメにワンオフの具現化系を殺すカメラだ。
部位欠損以外の怪我・・・切断されたものが残っていれば治せるが・・・ならどんと来いだが、覚悟していたとはいえやはり百式観音が直らないのは痛い。
それでも、何も得られなかったわけではない。この闘いで得た経験はさらなる修行に活かせる。まだまだ強くなれるという実感をネテロは久々に得た。
「さて、ワシは帰るが、おヌシに帰る場所はあるのかね？」
「幻想郷に帰れればそれが一番ですが、そんなこと言っていられませんし、適当に山の中ですごしますよ」
「ふむ・・・おヌシが良ければワシらの所に来んか？歓迎するぞい」
文の力は人間にとって脅威だ。手元において置けるのならそれが一番だ。
「遠慮しておきます。人間社会に入れ込むつもりはないです」
「まあそう言うと思っとったわい。あとはあまり大事をおこさんようにな。いつの時代も上はうるさいもんじゃ」
「では、悪いことをする前には許可を取ることにしましょう。突撃取材もそれはそれで面白いのですが」
文はバサッと翼を広げ、宙に浮く。
「それでは私も療養するとしますか。ごきげんよう」
そう言うと文は、そのまま山の奥へと飛んでいった。

「・・・会長の立場としては来てほしくなかったが、まあ、正直に言えば楽しかったよ」

後日、ハンター協会会長室。
『それで？例の妖怪騒ぎは解決したのかね？』
「私が出て対処しました。大きな危害を起こさないと約束させました」
ネテロは政府からの電話対応をしていた。
『約束？それではハンター協会はあれを排除できなかったと？それはそちらの力不足ということでよろしいのか？』
「この状態が最善だと判断したまでです。悪意を持たれて消息を絶たれるのだけはどうしても避けたかった」
『最善とは脅威が起こらないように無力化したことを言うのではないのかね？貴方の言い様はどうにも消極的に思える』
「ザバン市に出没した時点で対象がどの程度の能力を持っているかよくわからなかったのです。もちろん容易に対処できるものなら立会の最中に処理しておりました」
『それこそ蒸し返すことになるが、そちらの実力不足ということでしょう。会長でも厳しいのであれば、数を揃えてみてはどうですか？必要であれば我々の持つハンターに依頼しますが』
ハンターの中でも協会や政府からの依頼を専門に受ける、協会の斡旋専門、通称協専ハンターと呼ばれる者たちがいる。彼らもまたプロハンターであり、一定の実力を有しているものの、風評でも能力的にも、その評価は悪い。
依頼を勝ち取る能力がない時点でハンターとしては二流以下とされているからだ。
「お気持ちはありがたいのですが、総力戦に出たと判断された時点で

逃げられてしまうでしょう。瞬発力や限定条件下ならまだしも、恒常的に対象に追いつける速さをもつハンターはおりません。また、耐久力も私の一撃を何度も耐えるほどです。拘束能力を試すにも、妖怪という種族にはまだまだ理解が足りていない。一か八かということでもよろしいのであれば今からでも実行しますが」
『我々はそんなことを言った覚えはないよ?まあそちらの事情はわかった。まだあれが甚大な被害を及ぼしたわけでもないし、これから起こすわけでもないのなら強硬策を取らなくてもいい。ただ、約束を守らなくなった場合や、そもそもあれが日常的に摂取する食料が、我々が許容する範囲を超えているのなら、貴方がたの考える強硬策よりも良い策はある。そのときは・・・協力して頂けるかね?』
「・・・もちろん協力します。ですが、そんなときが来ないことを祈っております」
『であれば、次に先程話した被害の許容範囲についてだが・・・』

「やぁーっと終わったわい」
「お疲れ様です、会長」
武において最強たる会長でも、こと政治関係は弱いらしい。
だが、有力なハンターを犠牲にしてまで文を討伐する強硬策に至らなかったのは、ひとえに彼女の性質に依るところが大きい。
彼女の腹を満たすのには人間が必要だが、別に食人に至る必要はなく、精神的なもの、畏れを得られればそれで充分。
多少の無為な犠牲を伴うものの、それを咎めるには多大なる犠牲が必要。それを主張するだけで、現状維持を推し進められた。
「それで?今話題の彼女は何処におるのかな?」
「どうやら療養は終わったようですね。今はハンター試験を合格したゴンさんに接触しているようです」
「全く、妖怪の回復力は凄まじいもんじゃ。念能力者でも全治2週間はかかるものを」

ちなみに勝手にゴンを取引材料に仕立てたジンは別の仕事に行ってしまった。
さらに言えば、とうのゴン本人はこのことを知らない。まあゴンも嫌などころか嬉しいほどなので、誰も損はしていないのだが。

「えーっ！文ってネテロ会長と手合わせしたんだ！オレたちもハンター試験で会長とゲームしたんだけどさ、結局右腕を使わせるところまでしか行けなくてさ、文はどうだった？」
「ええ、私はやんごとなき事情であの人と試合しましたが、久しぶりに人間に負けを認めてしまいました。とても強い方でしたよ」
あの手合わせの際に申し訳程度に立場を隠していたが、文が出会った相手を特に調べないままにするはずもなく、その情報を集めた。その結果、ハンター協会会長であること、この世界の個の極地と呼べる実力の持ち主であることがわかった。
彼が人類の頂点だとしたら、おおよそ殆どの人間に対して勝てると考えられるが、得意な能力を持つ人間が跋扈するこの世界で事を起こすのは相応のリスクを伴う。
まあ、戦争を起こさずとも文は食料には困らないので、大事を起こす気はネテロに言われるまでもなくない。
「すごいなー！それってやっぱり文が妖怪だから？」
「ええそうです。まあゴンくんが天狗になったとして、あの人の域に達するには数十年はかかるでしょうがね」
「そんなー。でもオレ頑張るよ！」
「やっぱり今からでも妖怪になる修行始めませんか？」
「ううん、オレはジンに認められるような立派なハンターになってからでいいよ。それよりキルアはどうしたの？あんまり話したくないの？」
「・・・いや、その話だとあのジジイといい線いったってことだろ？感

心してただけだよ」
　内心キルアはビビっていた。ゾルディック家の教育によって自身より実力の高い者には手を出さないようにしつけられており、その差は到底埋められないものだと感じていた。
　よって彼からはなるべく彼女を刺激しないように努めていたが、彼女からの誘いを突っぱねる親友の言動に、いつしかこちらにも敵意を向けられないだろうかと思っていた。
「(いいですねえ、この畏れ。強さを知って平伏するのは私にとって都合がいいです。ゴンくんについていって本当に正解でした)それで、今度はどちらに行くんですか?」
「えーっとね、ここ。天空闘技場って言うんだけど・・・」
　彼らの旅は、一人の少女を加えて続いていく・・・・

Ｅｘｔｒａ　Ｓｔａｇｅ．　幻の影をみた旅団

「まったく、あまりパソコンの前から2週間も離れさせてほしくないもんだね」
「あそこの鍵を開けるにはパスワードを見つけるか、ハッキングするか、物理的に打ち破るかしかなかったんだ。繊細な宝物で、壁をぶっ壊すときの衝撃で価値がなくなりかねないものだった。それはわかっていたことだろう？」
「わかってるよ。これはただの愚痴。誰かさんがうっかりアクティブな監視カメラの前に躍り出ちゃったせいで画像消去にずいぶんと手間取っちゃってねー。めぼしいものが先に取られちゃったらどうしようかと思っただけだよ」

「悪かったって言ってんだろ。そんなに離れたくないんだったら、その携帯で情報を受け取れるようにすればよかったじゃねえか。できんだろ？」
「できるにはできるけど、あまり機密情報を抜き取るパソコンに繋がってる端末を増やすと、位場所を逆探知されるかもしれないから、セキュリティ上やらなかっただけ」
「時間が惜しい思ているならととと作業するね」
「そーゆー言い方するんだー。今度携帯壊したときに直してやんないよ？」
　とある廃墟にて、彼らは仕事からの帰還を果たしていた。
　鍵を開けるとかぶっ壊すとか言う内容から察するに、まともな仕事ではないが。
　彼らは幻影旅団と呼ばれている者たち。
　猛者がはびこる裏社会の中でもトップクラスの念能力者によって構成される盗賊団である。
「うへー、2週間も処理してなかったせいでボックスの中がいっぱいだ。全部処理するなら今日のところはこれだけで1日潰れそうだ」
　パソコンを弄っているのは情報担当のシャルナーク。

流星街出身でありながら最新の情報機器をも取り扱うことのできる能力はどこで手にしたのかわからない。
「おぉー、５００件もあんのか。見出しだけ見て適当に処理しちまえばいいんじゃねえか？たぶんこれ定時連絡がほとんどだろ？」
着物姿で腰帯に刀を差しているのはノブナガ。
常は特攻役を任されているあたり、頭の出来は後方支援役と比べればあまり良くない。
「よくわかったねノブナガ。だからちょいとこのボックス全体にこの自作プログラムをかませると・・・」
時系列順に煩雑になっていた情報に星マークがつけられる。
常日頃、同じ時間に同じ内容でやり取りされている連絡は星が少なく、テンプレートを使わない、臨時連絡は星が多くなっている。
「すげえなこりゃ。どうなってんだ？」
「なぁに、過去に蓄積されたデータから似通った内容と時間に送信された情報は優先度を低く、真新しいものとか簡潔すぎる文章は優先度を高くするようにコンピュータに学習させたのさ。結構苦労したんだぜ？」
「何やってるか全くわからないね。まあシャルが楽できてるならそれでいいね」
特徴的な喋り方をしているのはフェイタン。
拷問が趣味なだけあって、知ることへの拒否反応がないあたり伸びる余地はあるが、さすがに専門外だったようだ。
「それでシャルナーク、とりあえずその星が一番多いやつを見せてくれないか？それが終わったらこの盗んだグラスとワインで乾杯といこうじゃないか」
そして幻影旅団のまとめ役、団長ことクロロ。
読書好き（ビブリオマニア）なだけあって、その知識量、頭の回転率は群を抜いている。
「そいつは楽しみだねっと。なになに、これは通話履歴か。一方がハンター協会会長室、もう一方が・・・海の上・・・船かな？」
「世界地図の端っこじゃねえか。なんだってそんな所に？探検隊か？」

「おおよそその認識で合っているだろう。ノブナガは世界地図を見たことはあっても、その外側のことは知らないようだな」
「団長は知ってんのか？」
「そうだ。前人未到の地、あまりの危険さ故に探索が進んでおらず、地図に書くことも許されず、ある一定の地位にある者のみが知ることができる、通称「暗黒大陸」。一般常識として知られていないのはその危険度だけではなく、その地を踏破した人が得られるリターンが飛び抜けてでかいから、無断でそれを奪われると国のパワーバランスが崩壊すると言われているからだろうな」
「そいつはすげえな。で、その探検隊はなんて言ってんだ？」
「さすがに会話情報まではセキュリティレベルが高くて盗めなかったみたいだ。でも、同時に何かしらの数値データがハンター協会に送られたみたいだ。これは・・・位置座標と時間か。それも２つ」
　その座標データを世界地図に写すと、１つ目は地図の外側、２つ目は船を通り過ぎる形で陸へと向かっていた。
「これはどういうことね？救難信号でも受信したか？」
「なるほど・・・航海の途中、暗黒大陸から何かしらの物体が飛来、それを目にした船員は会長室へ報告を開始した。これを用いておおよその到着位置や時刻を割り出すために送られたと考えるのが自然か」
「さすが団長話が早い。画像データが送られた形跡があるけど、その物体を捉えたものと考えていいかも」
　クロロの予想は完全に的中していた。
　その位置情報は、文が魚に擬態した調査隊の船の上を通り過ぎたときに送られたものであった。
「てゆーかこれ、ちょうど俺たちが外出したときと同じ日付じゃねーか。タイミング悪いな」
「それにこれが同じペースで移動するとしたら、１０日前にはこの国に着いているって計算じゃないか？」
「宝石をくくりつけた渡り鳥でもない限り、我々の獲物ではないね。お宝と結びついていないならそのプログラムは欠陥品ね」
「いや、そうとも限らない。先程言ったとおり、暗黒大陸には莫大なり

ターンが存在すると言われている。それは何も資源に限らず、その地に生きるもの全てがリスクでありリターンになり得ると考えてもいい。記録から見るにすでに”収穫”は終わって徒労に終わる可能性は高いが、何も知らないのはそれはそれでリスクだ。調べる価値はあると思うぞ」
「わかった。それじゃみんなが来るまでの間にネットで調べられるところまで調べてみるよ」

「ということで、その後対象が着陸してからのハンター協会の動向を探って見たけど、手がかりなし。周辺地区の新聞やゴシップ誌まで調べたけど、これと言ったものはオレには見つけられなかった。以上」
時間差でアジトまで戻り、全員集合した幻影旅団。
暗黒大陸より飛来した謎の物体への対応は全員で議論すべき案件として、シャルナークが簡単なプレゼンテーションをした。
「一応聞いておくがシャルナーク、ハンター協会へのハッキングをやってるなんて俺は初めて知った。専門的なところはよくわからないが、相手はしっかりと情報閉鎖して来ているあたり、手慣れている。足はついていないだろうな？」
そう警鐘を鳴らすのはフランクリン。
性格は冷静沈着。熱くなる場面でも第三者視点で考えることができる。
「今回外出するにあたって情報はオフラインに蓄える設定にしていた。その中からあさっただけだから調べ物をする段階では危険は少ないんだ」
「この場合、シャルナークが嘘の情報を掴まされたという危険を想定する方がいいだろう。暗黒大陸からの飛来物という限られた者しかその価値を見いだせない情報であるが、凄腕のハッカーであれば知っているという前提で流されたとすれば説明はつく」
シャルナークの説明にクロロが補足を入れる。

「嘘だかなんだか知らねえが、調べるべきではあるんだろ？だったら調べて、やぶ蛇だったら殴り通す。俺たちだったら簡単だろ？」
脳筋の模範とも言える回答をしたのはウボォーギン。
ただし、並大抵の相手なら幻影旅団は暴力で解決できるため、タチが悪い。
「話が早くて助かるぜ。リスクリターンなんて考えるの面倒くせえからな」
ウボォーギンに同調するのは同じ強化系のフィンクス。
同じ初期メンバーとしてもやはり気が合うらしい。
「あまり驕るな・・・と言いたいところだが、あながち間違いではないのは頭が痛いところだ」
全身に包帯を巻いた男、ボノレノフ。
脳筋と同じ考えに至ったのがなんとも悔しいのだろうか。
「対象がお宝なのか調べるかどうか決めるところから、と言ったわね。私もこの強化系共に賛成よ。調べるリスクよりも調べないリスクのほうが大きいと思う。皆も同意見だと考えていいかしら？」
他人の嘘を見抜く、貴重な特質系の能力を持つパクノダ。
例え調査活動にカウンターを仕掛けてきたとしても、一人でも鹵獲できれば彼女の能力で確実に情報を得ることができる。
彼女の言葉に全員が肯定の意を示した。
「調べることで全員賛成、だな。なにか言いたいことがあるやつはいるか？」
「せっかく旅団全員が集まっているんだ。ここまでの話を聞いて何か心当たりがある者がいれば話を聞きたいな」
「心当たりがあるって言ったって、そいつの着陸予定日に俺たちは盗みに入っていて・・・あ。」
「この中でヒソカはハンター試験を受ける予定で不参加だったな。しかも試験会場は着陸予定場所近辺。すでに接触している可能性も高い」
「まだ何も話していないのにナチュラルにボクが嘘をつく前提で話を

振られても困るんだけど♣」
道化師の格好をした奇術師の男、ヒソカ。
団長クロロと戦うために入団したという経緯を隠さなかったことで、団員からの信用は地に落ちている。
「何も知らないなんて言ったら私が触る。というか何言っても読ませてもらうわよ」
「ここまで嫌われると悲しさすら感じてしまうね・・・♥今回は素直に話させてもらうよ♠」
「今回は、とかいうところが嫌われる原因よ」

ここは天空闘技場、２００階。
「見知った顔がいると思ったら、ゴンくんとキルアくんじゃないですか」
「あっ、アヤだ！」
「げっ」
「なんだいキミは♣人の会話に割り込まないでほしいね♦」
ヒソカの目に見えたのは、ゴンの後ろにつく一人の少女。
初見では特に思うことのない、ただの一般人であった。
彼ほどの念能力の達人ともなれば、意識せずとも”凝”を使っており、そのオーラ総量を常に確認している。
念能力者であればごく少量であってもオーラを”纏”っている。
彼女には何も見えなかった。
「ッ♠」
だが、ヒソカは確かな違和感を感じていた。
数々の戦闘によって彼の観察眼は優れている。どれくらい眼の前の相手が力を込めているか、どれくらいの力を込めればどのくらいの速度で動くことができるか、熟知している。
そんな彼から言わせてもらえば、目の前の彼女は”浮いて”いた。
まるで体重を持たないかのように、歩行の際に筋肉の収縮が見られ

ない。
今一度オーラを纏っていないか確認しても何も見えなかった。
「・・・♥」
短いスカートから伸びる太ももを凝視する様は変態であった。
「(なんかゾワってした)今気づいたんですが、そこの道化師はお知り合いですか?」
「こんな存在感あるやつ相手に無視決め込むとかすげーなって思ってたけど、ホントに気づいてなかったのかよ」
「汗ぐっしょりですよ。拭うものぐらい用意してから運動したらどうですか」
「ちげーよッ!?・・・えっ?アヤは平気なのか?」
今なおヒソカからは200階に上がるゴンたちへ”洗礼”として、念能力に依る気当てをしていた。
「なんということもないです。彼のように影に生きる方の気は当たりなれています」
「へぇ・・・♦じゃあこれ、見える?」
そう言うとヒソカは人差し指を立てる。
その意図は簡単。念能力者が持つ技術の一つ、”凝”を使えるかどうかだ。
ヒソカの”凝”では彼女のオーラを見ることができなかったが、それは彼女が常に自身のオーラを隠している可能性があるからだ。
その事実は彼女が格上である可能性を秘めているが、彼はそれを考慮に入れるどころか、考え付きもしない。
彼は自身を最強だと自負しているからだ。
せいぜいが「うまく隠せているか、隠すための発を開発したか」と思う程度だ。
「視力検査ですか?1本みえますよ。これでも鳥目ではないと思いますが」
ヒソカは伸縮自在の愛(バンジーガム)をノーモーションで射出する。
”凝”から見えなくする”隠”は使っていない。だが、念能力に覚

醒していない者には見えない攻撃だ。
粘着性を持った弾が目の前に迫る・・・だが、寸前で首をかしげることでその攻撃を避けた。
「見えてるじゃないか♠」
「不意打ちとは感心しませんね。ですがこう見えて動体視力はいいんですよ。やり合うならもっと広い場所のほうがいいでしょう？」
一触即発の危機の中、手が上がったのは意外な人物。
「アヤ。ヒソカとはオレがやりたいんだ。だから先に手を出さないで」
ゴンが文の手を引いた。
「・・・今、貴方は手も足も出ていないじゃないですか。それでもなお彼と闘いたいと？」
「うん。ハンター試験で借りを作られたんだ。だから、それをここで返したい。だから！オレはもっと強くなってヒソカに挑むんだ！」
「強くなれる、と。彼にだって勝ってみせると、言ってるんですね？」
「当たり前だ！」
眼の前で啖呵を切られた文は眩しいものをみたかのように目を細め、ヒソカはゾクゾクと背筋を震わせた。
「で、あれば、私が勝手に手を出すのは無粋の極みというもの。おとなしく手を引くことにしましょう。さあさ、強くなりたいんだったらこんな薄気味悪い場所にいつまでもいるもんじゃありません。でてったでてった」
そういうと文はしっしっと手をふり、ゴンたちを追い払う。
「アヤは一緒に来ないの？」
「珍しいものを見たので少しばかり話を聞いてから行きます」
「わかった。またね、アヤ！キルア、行くよ？」
キルアは「あ、あぁ」と未だに茫然自失した顔つきでゴンと一緒に下に降りていった。
「はじめまして、ヒソカさん、でしょうか。私は射命丸文と申します」
「はじめまして♥　ヒソカ＝モロウだよ♠　それで、話って？♦」

「大した話ではありません。少しばかり昔に地獄の妖精に”ぴえろ”なる者の話を聞きましてね。もう少しおどけたような方らしいのですが、あれは嘘だったのかどうか知りたくて」
「それは数あるピエロの顔の一つに過ぎない♥　おどけるピエロは奇抜な格好をしている♦　それを見たときに恐怖を感じる人がいたからこそ、恐怖の象徴としての道化師が生まれた♠」
「なるほど、地獄の妖精が嘘をついたわけではないと。ご協力感謝します」
　文はメモを残してゴンたちの後を追うべく、きびすを返した。
「ボクからも質問いいかな♣」
「なんでしょう、手短に頼みますよ」
「ボクの見立てだと、キミ、人間じゃないだろ？♠　見た目の体重の割に筋肉の運動量が少なすぎる♦　最初は念を巧妙に隠しているのかと思ったけど、そういう反応でもなかった♥」
　文の目つきが鋭くなった。
「あの目つきはただの変態ではなかったということですか」
「否定はしないんだね♥　まあボクとしてはキミが人間だろうがバケモノだろうがなんの関係もない♠　等しく、ボクが闘いたいと思うか否かだ♣」
「そうであっても、”この世界”の醜い化け物共と一緒にしてほしくはありません。私は醜きを捨て可愛さを得た妖怪、清く正しい射命丸文です」
「そして今ボクは先約がある♥　キミにも約束があるだろうから、今回は手を引こう♠　ボクが手を出すまでその美しい花を散らさないようにね♥」
「だれが散らすか！あ、いや、貴方に手を出してほしいわけではありませんから、勘違いしないように！」